

資料紹介

新収「谷井濟一関係資料」の概要とその紹介

植田 喜兵成智・鈴木 舞

〈解題〉

谷井濟一は、朝鮮総督府に嘱託として勤務し、明治期から大正期にかけて朝鮮古蹟調査事業などで活躍した考古学者である。学習院大学東洋文化研究所では、谷井が残したとみられる出版物の自筆の草稿類などの文書を新たに収蔵することとなった。本稿は、この新収資料を「谷井濟一関係資料」と呼称することとし、資料の概要とその紹介をするものである。

・谷井濟一本人について

まず谷井濟一の経歴について略述したい。¹⁾ 谷井は、明治十三年（一八八〇）、和歌山県和歌山市関戸に生まれる。谷井家は、和歌山市関戸のいわゆる旧家であり、江戸時代には油商を営む商家であったという。父の勘蔵（一八五三～一九三〇）は、和歌山県農工銀行頭取、海草郡会議員、貴族院多額納税議員などを歴任した。なお谷井濟一本

人の名前の読み方は、履歴書によると「ヤツイセイイツ」とある。^②

長じて後、東京帝国大学文科大学史学科において国史を専攻し、明治四〇年（一九〇七）に卒業する。卒業後、日本古代史の研究を志して、京都帝国大学大学院に入学したが、考古学に関心が移ったため、京都帝大を中退して拠点を東京に戻した。東京転居後、しばらくは東京帝室博物館収蔵の出土遺物調査に従事した。

谷井の興味関心が考古学に移ったきっかけは喜田貞吉にあったようである。当時、京都帝国大学の講師であった喜田の大和畝傍飛鳥地方における遺跡踏査にしたがった結果、考古学の研究を志すようになったという。^③

次なる転機は、朝鮮における古蹟調査事業への参加である。明治四二年（一九〇九）、東京帝国大学工科大学建築学科助教であった関野貞は、韓国度支部より古建築物の調査を囑託された。^④調査において関野は、古建築のみならず、幅広く遺跡・工芸品などの保存の必要性について調査することになった。その調査助手になったのが谷井と同大建築学科卒の栗山俊一であった。谷井は、歴史学・考古学の知識を備えていたことに加えて、写真の腕前を高く評価され採用されたようである。^⑤

同年九月、谷井は朝鮮総督府の古蹟調査囑託として、朝鮮に渡り、関野とともに朝鮮半島各地の遺跡・遺物を調査する。初年度は、京城よりはじめ、開城、平壤さらには慶州、金海まで訪ねている。特に谷井は、金海貝塚の発掘を行う。その後も連年、関野とともに朝鮮をめぐる各地を踏査している。たとえば、榮浪土城や鳳山の唐土城、張撫夷墓などの重要な調査にも関わった。

大正五年（一九一六）、朝鮮総督府博物館事務囑託に任じられ、京城（現・ソウル特別市）に移住する。同年に古蹟調査委員会が設立され、あわせて「五箇年計画」が策定されたことで、より組織的な踏査・発掘調査が行われるようになった。当初、谷井は囑託として古蹟調査委員となった関野たちを補佐する立場であったが、翌大

正六年（一九一七）には自身も古蹟調査委員に任じられた。大正五・六年の調査については、朝鮮総督府からそれぞれ『大正五年度古蹟調査報告』、『大正六年度古蹟調査報告』として刊行されており、大正五年度のものには「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」、大正六年度のものには「黄海道鳳山郡・平安南道順川郡及平安北道雲山郡古蹟調査略報告」および「京畿道広州・高陽・楊州・忠清南道天安・公州・扶余・青陽・論山・全羅北道益山及全羅南道羅州十郡古蹟調査略報告」が谷井名義で提出されている。この時期に谷井が精力的に活動していたことがわかる。

大正一〇年（一九二二）、父・勘藏の病によって博物館嘱託を辞して和歌山に帰郷した。帰郷後は、和歌山県・市の文化財審議会院長や和歌山女子専門学校校長などを歴任した。⁶⁾

このように古蹟調査に深く関与した谷井は、その報告書である『古蹟調査報告』、『古蹟調査特別報告』の刊行はもちろんのこと、『朝鮮古蹟図譜』の編纂にも関わった。『朝鮮古蹟図譜』は、朝鮮半島各地の遺跡・遺物を時代ごとにまとめたものであり、一九一五年三月～一九二六年六月にかけて計一五冊が朝鮮総督府から発行された。本シリーズは、関野の方針によって編纂され、この業績によって関野は一九一七年にフランス学士院のスタニスラス・ジュリアン賞を与えられた。

谷井が日本に帰郷したため、代わって朝鮮総督府博物館に赴任した藤田亮策は、『朝鮮古蹟図譜』について以下のように述懐する。

ここに特筆すべきは「朝鮮古蹟図譜」は十五冊の前半七冊までが、谷井氏の編輯であることである。勿論、

関野貞先生の計画と厳重の校閲とで出来たのであるが、良く先生の意を帯して彪大の原稿作製をしたのは谷井氏であり、少なくとも第一冊乃至第五冊は明治四十二年から大正三年に至る調査資料の大集成と言ってよ

い。関野先生がこの書の為に巴里のアカデミーから賞状を貰ったのに対して、谷井氏の功績も考うべきである。

とまで述べ、谷井の功績をたたえている。

・本資料の入手の経緯とその内容について

さてひるがえって今般寄贈された資料について現在まで明らかになったことを述べておきたい。本資料は、令和元年度昭和会館研究助成採択課題「植民地期朝鮮における学術とその再評価―友邦文庫所蔵の京城帝国大学・朝鮮総督府博物館関係資料を中心に―」の調査過程で入手することになった。点数は文書六九点である。決して分量は多いとはいえないが、谷井済一の直筆の原稿ということで、朝鮮総督府の行った発掘調査、ひいてはその博物館事業に関連する貴重な資料と判断し、資料を所蔵していた林裕己氏より寄贈していただいた。

谷井済一関係資料は、朝鮮総督府用箋、原稿用紙に手書きで記された文書であり、以下に挙げるように、その内容が谷井執筆の出版物と合致することから、すべて谷井本人が自筆したものと推定される。現在、各文書の分析作業を進めており、その文書類を内容に基づいて分類すると、次の五つのおりとなる。なお、本稿中で記す資料番号については、寄贈された際にそれぞれひとまとまりになっていた六束を、仮に「一」～「六」と番号づけしたものであり、内容とは必ずしも関係はしない。番号づけの詳細については、後述する「凡例」を参照いただきたい。

- 一 調査報告書の刊行に関わるもの
- 二 調査予定・行程表
- 三 刊行・調査以外の業務に関わるもの
- 四 個人資料
- 五 詳細不明

※各文書のリストは後掲【谷井濟一関係資料リスト】を参照。

第一グループは「調査報告書の刊行に関わるもの」である。これらは、①刊行業務全体に関わるもの、②特定の刊行物に関わるもの及びその草稿に分類した。さらに後者については、便宜上、刊行物名の判明したものと未詳のものとの細分類した。また、刊行物名が判明したものについては、「内容1」に刊行物名、「内容2」にその具体的な箇所を記した。その中には、大正五年前後の『古蹟調査報告』に関する草稿、『古蹟調査特別報告』に関する出版計画書や同書の草稿と推定される文書、そして『朝鮮古蹟図譜』に関連する文書がある。特に仮四―二二・三二／四―一九・二〇／四―五・六の『朝鮮古蹟図譜』に関連する文書には、出版年度割や執筆・出版に際しての「事務割表」などが見られる。ここから谷井が編集作業の重要な部分にまで関わっていたことがわかり、前掲した藤田亮策の述懐を裏付ける。

第二グループ「調査予定・行程表」は、大正六年度から大正一〇年度にかけての古蹟調査に関する現地の調査分担表や日程表、後日の計画などを記したものである。大正七年度後期までのものは実行されたもの、あるいは

その報告であると推測される。実際、大正六年度・七年度の調査地は、報告されている調査地域とほぼ一致する⁽⁸⁾。また、仮五―七―一〇の大正八年度前期の現地調査行程表については、詳細な行程が付され、周辺の調査に対する計画書であるように思われる。一方、大正八年度後期―大正一〇年度前期については「調査予想地方」であり、記されている計画も大枠のみである。第一グループの仮四―五〇に「大正八年二月十八日」の日付も見られる点も看過できない。以上の点は、本資料の作成年代の下限を推定するうえで考慮すべきであろう。

一方、大正八年（一九一九）は、三・一独立運動が発生したため、充分に調査が行われず、それ以降の調査も当初の計画のとおりには行われていないとされる⁽⁹⁾。とすれば、大正八年度の前期調査を実行する予定であったが、その直前になって三・一独立運動がおこったことよって、計画は中止となり、その後の計画も大幅に変更されたのではないだろうか。それゆえ、大正六年度・七年度のもとは実施された調査の情報と一致し、それ以降の年次のもとは大正八年以前に計画された行程を記したものであろう。本資料群は、いわば「幻」の古蹟調査に関する計画であるといえる。

なお、年次の記されていない仮四―一五―一六の調査日程は、日付と行程から大正五年度の調査時のものと推測される。仮四―九―一〇の調査日程は、時期の断定はできないが、大正六年度に調査された高陽や楊州地域での行程が記されている⁽¹⁰⁾。

第三グループ「刊行、調査以外の業務に関わるもの」は、記載内容は判明したが、調査・出版以外の業務に関する⁽¹¹⁾と推測される文書で、1と2のグループに分類できないものをここにまとめた。経緯不明ながらアメリカのクリーブランド博物館（美術館）に送付する調査報告書の草稿、室内見取り図、発掘調査費用の計算書などがこれに含まれる。

第四グループ「個人資料」は、谷井個人のプライベートに関する記録であり、谷井本人の手許控えとみられる資料である。作業リストと個人の時間割表などがこれに該当し、谷井の多忙さがわかる。

第五グループ「詳細不明」は、現段階の調査では分類することができなかった文書である。一部は遺跡のスケッチとみられるものもあり、古蹟調査と関連するのではないかと推測されるが、現段階では暫定的にこのような分類とした。

このように谷井濟一関係資料を整理してみると、その多くは朝鮮古蹟調査に関わるものであることがわかる。関野貞とともに調査に従事した谷井の資料は、貴重なものであると考えられ、今後詳細について調査していきたい。

・他の谷井資料との関係について

ところで谷井濟一関連の資料は、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館にも所蔵されている。そちらの資料群は、「谷井コレクション」と呼ばれ、二〇一三年に谷井伸光氏によって寄贈されたもので、谷井家に代々伝えられた民俗文化財、谷井勘蔵、谷井濟一関連の所持品、書籍、書簡、写真等、約五〇〇〇点に及ぶという。同時期に寄贈された古文書類については、和歌山県立文書館に所蔵されている。谷井濟一に関連するものとしては、朝鮮半島などで撮影された遺物や遺跡の写真群があるとされ、その概要が一部報告された。⁽¹¹⁾ たとえば、明治四二年（一九〇九）の日付のある平壤の石巖洞古墳から出土した副葬品の写真（谷井写真122）⁽¹²⁾ や、張撫夷墓の写真（谷井写真258）⁽¹³⁾ 259、262）⁽¹⁴⁾ 265）などが見られる。これらはともに谷井が発掘に携わった遺跡の写真であり、当時の現場の様子を伝える貴重な資料である。今後、資料の全容が明らかになることが期待される。

また谷井濟一に関連する資料は、海を渡って韓国の嶺南大学校にも所蔵されている。資料の概要について韓国大手新聞の一つである『한겨레』¹⁵⁾紙上で報告された連載記事があり、資料の一部は「日帝強占期朝鮮古蹟調査研究資料」において紹介されている。

記事によると、当該の資料は、鄭仁盛嶺南大学校教授が日本で購入したものであり、「谷井備忘録」と呼称され、メモや写真リストなど約一万点に及ぶという。資料の内訳は、その全容が明らかにされていないが、学生時代のレポート、「鷄林紀行」と称される明治四二年（一九〇九）の古蹟調査に関する日誌、履歷書、給与書類、調査経費の領収書や、そのほか張撫夷墓の実測図面、同墓出土の銘文磚の拓本など発掘調査の記録類があると思われる。こちらもまた膨大な資料群であり、早期の報告書の刊行が待たれる。

以上、和歌山県紀伊風土記の丘資料館および嶺南大学校に所蔵される谷井濟一関連の資料について整理してみた。「谷井コレクション」、「谷井備忘録」の詳細は不明な点があるものの、明らかに本資料「谷井濟一関係資料」と関連するものであることがわかる。それぞれの資料がいかなる関係にあるのかについては、各資料を比較検討するなどして詳細な分析を加えなければならぬだろう。本稿では、ひとまずの検討の成果として、わずかではあるが、文書六九点の概要を紹介した。今後の研究の進展の一助となれば幸いである。

註

- (1) 以下の谷井濟一および谷井家の来歴については、
 富加見泰彦・藤森寛志「谷井コレクションに残る古写真群」(『紀伊風土記の丘研究紀要』三、二〇一五年)、藤森寛志「谷井濟一の履歴書(1)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』四、二〇一六年)参照。
- (2) 藤森寛志「谷井濟一の履歴書(1)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』四、二〇一六年)。
- (3) 藤森寛志「谷井濟一の履歴書(1)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』四、二〇一六年)。
- (4) 関野貞の古蹟調査の日程や踏査地については、次の論考を参照した。早乙女雅博「関野貞と朝鮮考古学」(藤井恵介・早乙女雅博・角田真弓・西秋良宏編『関野貞アジア踏査』東京大学総合研究博物館、二〇〇五年)、高橋潔・広瀬繁明・山本雅和「関野貞の朝鮮古蹟調査」(同書)、早乙女雅博『新羅考古学研究』(同成社、二〇一〇年、二頁)一〇七頁)。
- (5) 藤田亮策「谷井濟一評議員の逝去を悼む」(『考古学雑誌』四四―三、一九五九年)、梅原末治「日韓併合の期間に行われた半島の古蹟調査と保存事業にたずさわつた一考古学徒の回想録」(『朝鮮学報』五一、一九六九年)。
- (6) 藤田亮策「谷井濟一評議員の逝去を悼む」(『考古学雑誌』四四―三、一九五九年)。
- (7) 藤田亮策「谷井濟一評議員の逝去を悼む」(『考古学雑誌』四四―三、一九五九年、七四頁)。
- (8) 谷井濟一「京畿道広州・高陽・楊州・忠清南道天安・公州・扶餘・青陽・論山・全羅北道益山及全羅南道羅州十郡古蹟調査略報告」(『大正六年度古蹟調査報告』朝鮮総督府、一九二〇年、五九五―五六八頁。著者不明「大正七年度古蹟調査成績」『朝鮮彙報』大正八年八月号、朝鮮総督府、一九一九年、一二四―一二九頁)。
- (9) 早乙女雅博『新羅考古学研究』一八頁。なお、大

正八年度に実施された調査については、池内宏『朝鮮総督府大正八年度古蹟調査報告 第一冊 咸鏡南道咸興郡に於ける高麗時代の古城址 附平定郡の長城』朝鮮総督府、一九二二年参照。

(10) 『大正六年度古蹟調査報告』朝鮮総督府、一九二〇年、一四頁。

(11) 和歌山県紀伊風土記の丘資料館に所蔵される「谷井コレクシヨン」については、富加見泰彦・藤森寛志「谷井コレクシヨンに残る古写真群」(『紀伊風土記の丘研究紀要』二、二〇一三年)、同「谷井コレクシヨンに残る古写真群(朝鮮・中国)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』三、二〇一五年)、藤森寛志「谷井濟一の履歴書(1)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』四、二〇一六年)、富加見泰彦・藤森寛志「谷井コレクシヨンに残る古写真群」(『紀伊風土記の丘研究紀要』五、二〇一七年)、富加見泰彦「谷井コレクシヨンに残る古写真群(朝鮮・中国)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』六、二〇一八年)、藤

森寛志「谷井コレクシヨンに残る白黒ネガフィルム」(『紀伊風土記の丘研究紀要』七、二〇一九年)で紹介されている。

(12) 富加見泰彦・藤森寛志「谷井コレクシヨンに残る古写真群(朝鮮・中国)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』三、二〇一五年)。

(13) 富加見泰彦・藤森寛志「谷井コレクシヨンに残る古写真群(朝鮮・中国)」(『紀伊風土記の丘研究紀要』五、二〇一七年)。

(14) 「야쓰이 비망록」으로 본 조선 발골비사(『谷井備忘録』にみる朝鮮発掘秘史)というタイトルで全一六回の連載および連載終了後の鄭仁盛氏へのインタビュー記事一回で構成される。各記事は、二〇一六年二月二十九日から同年九月一九日にかけて連載され、鄭仁盛氏とハンギョレ新聞記者のノヒョンソク氏が著したものである。以下のURLにおいて連載記事全文を読むことができ。 <http://www.hani.co.kr/arti/SERIES/769/>

title1.html (二〇二〇年一月一日閲覧)

『1909년「朝鮮古蹟調査」의 기억—『韓紅葉』

(15) 鄭仁盛「고적조사위원 야쓰이세이이쓰와 『야쓰

과 谷井濟一의 조사기록』国立文化財研究所考古

이 자료」(古蹟調査委員谷井濟一と『谷井資料』)

研究室、二〇一六年。

〈付記〉

本稿は、令和元年度昭和会館研究助成採択課題「植民地期朝鮮における学術とその再評価―友邦文庫所蔵の京城帝国大学・朝鮮総督府博物館関係資料を中心に―」(代表：植田喜兵成智)、令和二年度昭和会館研究助成採択課題「近代日本の中国・朝鮮調査と学術研究―東洋文化研究所新収の澤口文庫・谷井濟一関係資料を中心に―」(代表：同上)および二〇二〇年度学習院大学東洋文化研究所アーカイブズプロジェクト「東洋文化研究所蔵の朝鮮近代資料の調査・整理」セクション(代表：磯崎典世)の研究成果の一部である。支援を賜った一般社団法人昭和会館、学習院大学東洋文化研究所、ならびに貴重な資料を寄贈してくだった林裕己氏に感謝したい。また、本稿で取り上げた東洋文化研究所蔵谷井濟一関係資料については、その写真版及び翻刻(稿)を、本稿に先んじて、植田・鈴木編『学習院大学東洋文化研究所新収谷井濟一関係文書(仮)翻刻稿』(学習院大学東洋文化研究所、二〇二〇年六月、非売品)として発行済である。併せてご参照いただければ幸いである。

附録 谷井清一関係資料 写真版

《凡例》

【資料番号について】

仮一 — 一 (一枚目・表)

仮資料番号 ページ番号 原稿用紙の枚数・用紙の表裏

○ 仮資料番号・東洋文化研究所に寄贈された際のまとまりで番号を付した。内容が相互に関係しない場合がある。

○ ページ番号・仮資料番号と同じく、寄贈された状態のページ順に番号を付した。内容の順序ではない。

○ 原稿用紙の枚数・用紙の表裏・原稿用紙の枚数を示す。また両面に文字があるものは表裏を明記した。

【資料のタイトルについて】

文書の大部分が草稿類であるため、各文書の正式なタイトルは詳らかでない。そこで内容を分析した結果、「内容／内容1」にタイトルに準じる資料の性格を示す文言を入れた。そのなかでもさらに細かく分類できるものは「内容2」として詳細を付した。

【原稿用紙の寸法および種類について】

各原稿用紙は、それぞれ異なるサイズ及び罫線の色をもつ。その詳細は、以下のとおりである。

○ 仮一―一―一八	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.5cm	朱	版心に「朝鮮総督府」とあり
○ 仮二―一―一〇	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.5cm	朱	同右
○ 仮三―一―二	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.0cm	朱	同右
三―六	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.5cm	黄	
○ 仮四―一―二	(タテ) 26.5cm × (ヨコ) 19.0cm	朱	版心に「朝鮮総督府」とあり
三―五六	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.5cm	朱	同右
○ 仮五―一―二四	(タテ) 27.0cm × (ヨコ) 19.5cm	朱	同右
○ 仮六―一―一八	(タテ) 24.0cm × (ヨコ) 17.0cm	朱	同右

これらを種類ごとにまとめると、次の四種となる。

○ 朝鮮総督府用箋 A	仮一―一―一八	仮二―一―二〇
	仮四―一―五六	仮五―一―二四
○ 朝鮮総督府用箋 B	仮六―一―一八	
○ 朝鮮総督府用箋 C	仮三―一―二	
○ 原稿用紙	仮三―三―六	

※ 仮四―一―二は、仮四―三―五六とは寸法がわずかに異なるが、これらは同質の原稿用紙であり、経年劣化による大きさの変化であると考えている。

谷井清一関係文書リスト

一、調査報告書の刊行に関わるもの

① 刊行業務全体に関わるもの

仮番号	内容	用箋の種類
仮四一七 仮四一八	朝鮮総督府からの各種出版物すべてを含めた「事務割表」 (※仮四一七は裏面で、詳細不明の文字があるが、便宜上ここに分類しておく) 朝鮮総督府からの各種出版物すべてを含めた「事務割表」 (※仮四一八は裏面で、詳細不明の文字があるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A

② 特定の刊行物に関わるもの及びその草稿

仮番号	内容一	内容一	用箋の種類
仮四一七 仮四一八 仮四一五 仮五二三 仮五二四	各年度の『古蹟調査報告』に関するもの 大正五年度分の畧報告及び報告の事務割表 (※仮四一八は仮四一七の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく) 大正六年度畧報告の紙数概算表 大正六～七年度の畧報告の掲載地域或いは遺跡リストか (※仮五二三・二四は仮五二三の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A 朝鮮総督府用箋 A 朝鮮総督府用箋 A	

仮番号	内容一	内容一	用箋の種類	
仮一一三	『大正五年度古蹟調査報告』(朝鮮総督府、大正六年刊)に関するもの(草稿他)	「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書(谷井囑託提出)」の目次部分(四四～四五頁)の草稿か	朝鮮総督府用箋 A	
仮一一四			朝鮮総督府用箋 A	
仮一一五			朝鮮総督府用箋 A	
仮一一六			朝鮮総督府用箋 A	
仮一一七			朝鮮総督府用箋 A	
仮一一八			朝鮮総督府用箋 A	
仮二一九			※上記目次を作成する際の発掘調査写真の一覧か	朝鮮総督府用箋 A
仮二二〇			「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」(八六一～八八三頁)のうち、「復命書」(八六一頁)の草稿か	朝鮮総督府用箋 A
仮二二一			「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」(八六一～八八三頁)のうち、「緒言」「一 晩達面第一号墳」「三 晩達面第二号墳」「四 晩達面第三号墳」にかけての本文(八六五～八六八頁)のペン書き草稿か	朝鮮総督府用箋 A
仮二二二			「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」(八六一～八八三頁)のうち、「緒言」「一 晩達面第一号墳」「三 晩達面第二号墳」「四 晩達面第三号墳」にかけての本文(八六五～八六八頁)のペン書き草稿か(※ただし、「三 晩達面第二号墳」については、二行で執筆が停止しており、下記のように、「四 晩達面第三号墳」草稿のあとに、改めて鉛筆書き草稿が見られる)	朝鮮総督府用箋 A
仮二二三		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二四		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二五		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二六		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二七		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二八		朝鮮総督府用箋 A		
仮二二九		朝鮮総督府用箋 A		
仮三〇		朝鮮総督府用箋 A		
仮一一八		朝鮮総督府用箋 A		

仮番号	内容一	内容一	用箋の種類
仮一―一九	同右	同右	朝鮮総督府用箋 A
仮一―一〇	同右	(※仮一―一〇は仮一―一九の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮一―一一 (八行目)			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一二 (九行目)		「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」(八六一―八八三頁)のうち、「三 晚達面第二号墳」(八六六―八六八頁)の鉛筆書き草稿か	
仮一―一三 (六行目)			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一四 (七行目)		「平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書」(八六一―八八三頁)のうち、「(五) 結語」の本文(八六八頁)の鉛筆書き草稿か	朝鮮総督府用箋 A
仮一―一五			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一六			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一七 (七行目)			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一八			朝鮮総督府用箋 A
仮一―一九			朝鮮総督府用箋 A
仮一―二〇			朝鮮総督府用箋 A
仮一―二一 (八行目)			朝鮮総督府用箋 A
仮一―二二			朝鮮総督府用箋 A
仮一―二三 (六行目)			朝鮮総督府用箋 A
仮一―二四			朝鮮総督府用箋 A
仮四―一三	『古蹟調査特別報告』(第一冊)	『古蹟調査特別報告に就いて』と題する、意見書、的なものの草稿か(T八・二一八記)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一四	『古蹟調査特別報告』(第六冊、朝鮮総督府、大正八年)	*仮四―一三の右肩に「1」、仮四―一九の右肩に「2」とあることから、両者に連続性のあることが分かる	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一五〇	刊(昭和五年)の(草稿他)		朝鮮総督府用箋 A
仮四―一四五		『古蹟調査特別報告』の執筆及び出版計画書か(※仮四―一四六は仮四―一四五の裏面で、文字情報はないが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一四六			朝鮮総督府用箋 A

仮番号		内容	用箋の種類
仮四―五三		何らかの出版物の図版作成の分担表	朝鮮総督府用箋 A
仮四―五四		（※仮四―五四は仮四―五三の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく）	朝鮮総督府用箋 A
仮六一―		何らかの出版物の図版一覧の草稿及び図版のレイアウト見本か	朝鮮総督府用箋 B
仮六一―二		（※仮六一―二、六一―四、六一―六、六一―八、六一―〇、六一―二は、白紙であるが、それぞれ仮	朝鮮総督府用箋 B
仮六一―三		六一―一、六一―三、六一―五、六一―七、六一―九、六一―一一の裏面であるため、便宜上ここに分類	朝鮮総督府用箋 B
仮六一―四		しておく）	朝鮮総督府用箋 B
仮六一―五			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―六			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―七			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―八			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―九			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―〇			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―一			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―二			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―三			朝鮮総督府用箋 B
仮六一―四			朝鮮総督府用箋 B

二・調査予定・行程表

仮番号	内容	用箋の種類
仮四一四七	大正六年度前期の現地調査分担表か（小場・小川・野守分）	朝鮮総督府用箋 A
仮四一四八	大正六年度後期の現地調査分担表か（小場・小川・野守分）	朝鮮総督府用箋 A
仮五一一	大正六年度後期の現地調査日程（無記名、谷井分か）	朝鮮総督府用箋 A
仮五一二	（※仮五一一は仮五一一五の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく）	
仮五一三		朝鮮総督府用箋 A
仮五一四		朝鮮総督府用箋 A
仮五一五		朝鮮総督府用箋 A
仮五一六		朝鮮総督府用箋 A
仮四一四三	大正七年度後期の現地調査分担表か（小場・小川・野守分）	朝鮮総督府用箋 A
仮四一四四		朝鮮総督府用箋 A
仮四一四三	大正七年度後期の調査日程（報告）（小場・小川・野守分）	朝鮮総督府用箋 A
仮四一四四		朝鮮総督府用箋 A
仮五一一七	大正八年度前期の現地調査行程表か（谷井・小場・小川・野守分）	朝鮮総督府用箋 A
仮五一一八	（※仮五一一〇は仮五一一九の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく）	朝鮮総督府用箋 A
仮五一一九		朝鮮総督府用箋 A
仮五一一〇		朝鮮総督府用箋 A

仮五―一	「大正八年度後期古蹟調査予想地方」(谷井・小川・野守分) (※仮五―一二は仮五―一一の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮五―二		
仮五―三	「大正九年度前期古蹟調査予想地方」(谷井・小場・小川・野守分) (※仮五―一四は仮五―一三の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮五―四		
仮五―七	「大正九年度後期古蹟調査予想地方」(関野・谷井・小川・野守分) (※仮五―一八は仮五―一七の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮五―八		
仮五―一五	「大正一〇年度前期古蹟調査(特別) 予想地方」(関野・谷井・小場・小川・野守分) (※仮五―一六は仮五―一五の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮五―一六		
仮五―一九	大正九年度前期～大正一〇年度前期分の調査地域について	朝鮮総督府用箋 A
仮五―二〇		
仮四―九	某年九月二八日～一〇月四日までの調査日程 (※仮四―一〇は仮四―九の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一〇		
仮四―一五	某年五月七日～七月一五日までの調査日程 (※大正五年五月の調査日程か)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一六		

三、刊行・調査以外の業務に関わるもの

仮番号	内容	備考
仮四―三九	クリーブランド博物館へ送付する作品に関する調査報告書の草稿か	朝鮮総督府用箋 A
仮四―四〇		
仮四―三五	仮四―三九・四〇報告書の続き及び英語版か〔23rd. III. 6.〕の記述あり、大正六年三月二三日を意味するか	朝鮮総督府用箋 A
仮四―三六		
仮四―四一	室内配置図か（机椅子あるいは展示ケース）	朝鮮総督府用箋 A
仮四―二三	人員表か	朝鮮総督府用箋 A
仮四―二四	（※仮四―二四は仮四―二三の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく）	
仮四―五二	人員表か	朝鮮総督府用箋 A
仮六―一五	何らかの発掘調査における調査費用の計算表	朝鮮総督府用箋 B
仮六―一六	（※仮六―一六は仮六―一五の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく）	
仮五―二一	大正七年度～大正一〇年度における各年度の図版作成計画及び作成者リスト	朝鮮総督府用箋 A
仮五―二二		

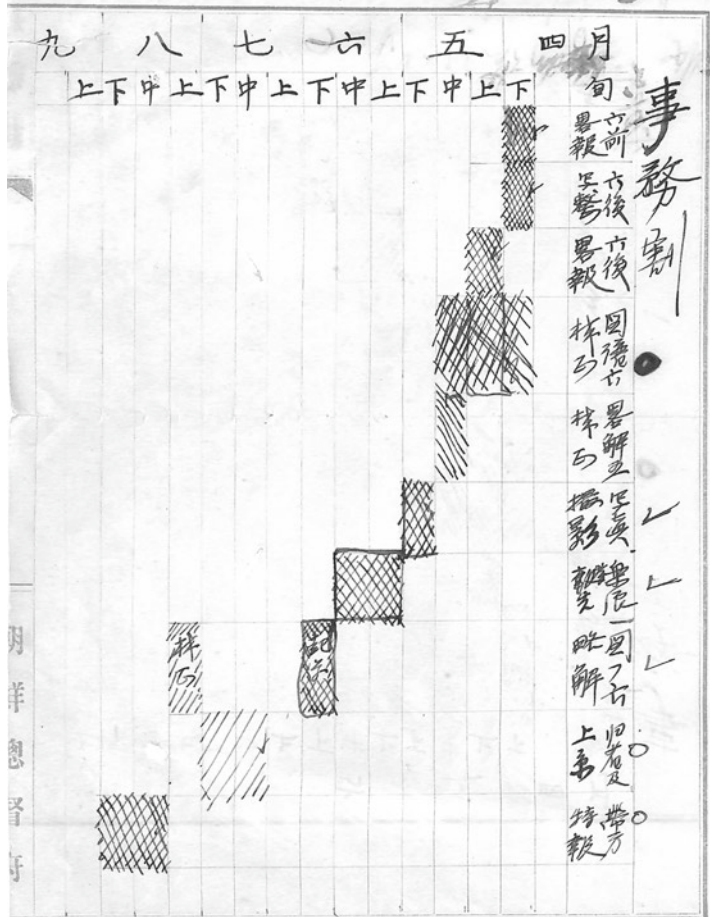
四：個人資料

仮番号	内容	用箋の種類
仮四―二五	図書目録 (※仮四―三〇は仮四―二九の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―二六		朝鮮総督府用箋 A
仮四―二七		朝鮮総督府用箋 A
仮四―二八	作業リスト (備忘録) か	朝鮮総督府用箋 A
仮四―二九		朝鮮総督府用箋 A
仮四―三〇		朝鮮総督府用箋 A
仮四―三一	作業リスト (時間割表) か (※仮四―三四は仮四―三三の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―三二		朝鮮総督府用箋 A
仮四―三三		朝鮮総督府用箋 A
仮四―三四	個人の時間割表 (大正六年一月六日)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―三七		朝鮮総督府用箋 A
仮四―三八		

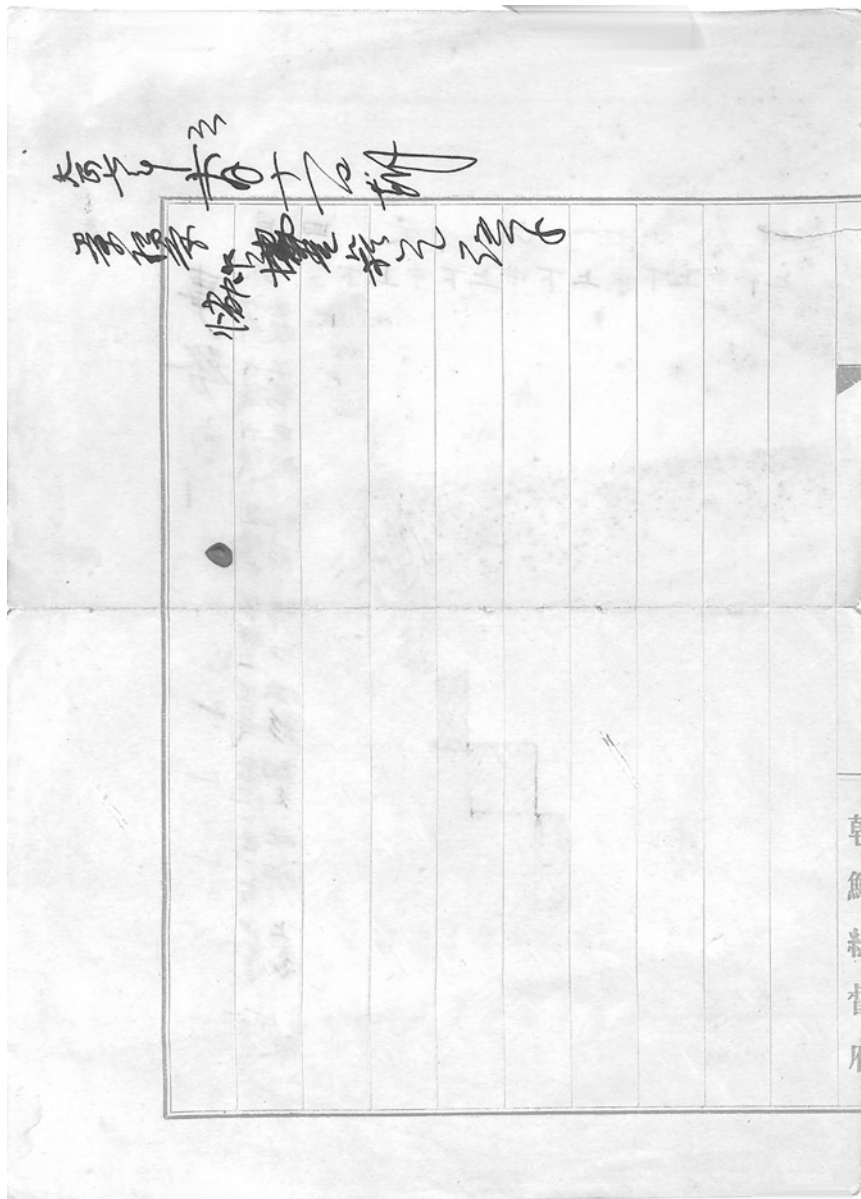
五・詳細不明

仮番号	内容	用箋の種類
仮一―一七	白紙 (※仮一―一七は仮一―一六の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮一―一八	遺物の断面図スケッチ	朝鮮総督府用箋 A
仮四―一	各種遺物の名称及び点数に関する記載あり (※仮四―一は仮四―一の裏面)	
仮四―二	「乗馬」に関する記載及び大正六年一月一三日の日付あり (※仮四―四一の裏面であるが、内容は四一(表面)と連続しない)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―四二	「京城」、「開城」などの門について記載あり (※仮四―五六は仮四―五五の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―五五	「京城」、「開城」などの門について記載あり (※仮四―五六は仮四―五五の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 A
仮四―五六	「大袍衣仏像」の文字あり (※仮六―一八は仮六―一七の裏面で、白紙であるが、便宜上ここに分類しておく)	朝鮮総督府用箋 B
仮六―一七		
仮六―一八		

一、調査報告書の刊行に関わるもの
 ①刊行業務全体に関わるもの
 仮四―一七（九枚目・表）



仮四十一八（九枚目・裏）



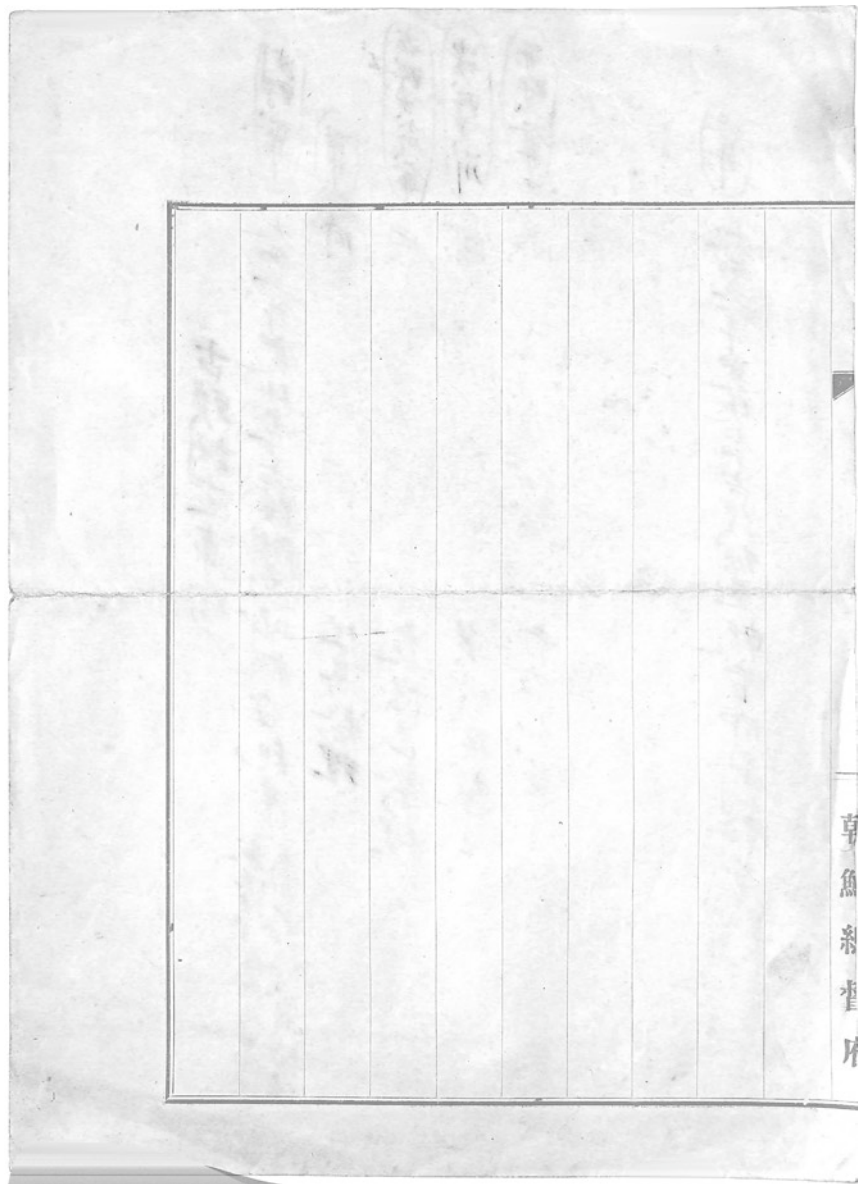
② 特定の刊行物に関わるもの及びその草稿
各年度の『古墳調査報告』に関するもの

仮四一七（四枚目・表）

<p>三</p>	<p>出野 昇</p>	<p>三井</p>	<p>淡野 清 昇</p>	<p>出野 清 川</p>	<p>米野 三 昇</p>	<p>三</p>
<p>古蹟調査事務</p>						
<p>大正年度秋季古蹟調査略報告起草 <small>（兼博作同路増上擔任 高田氣作一昇擔任）</small></p>	<p>同 写真整理</p>	<p>同 發振品整理</p>	<p>同 資料回製戻</p>	<p>同 報告起草</p>	<p>大正年度秋季古蹟調査報告印刷校正</p>	

月 洋 恩 督 守

仮四十八(四枚目・裏)



大正六年・度皇朝志紙数概系表

一本文(十行 辛字 造)

一約式(拾頁 内外)

一單紙(銀版アリト。一画面制)

一約式(六十頁 武拾枚(早頁) 内外)

一皇厚(石版) 放美(三) 片石 越

一約式(六十頁) 武拾枚(早頁) 内外

方角
同包
七
初呼
七
五頁

四、八
同
紙

月 洋 國 誌 子

仮五十二四（二枚目・裏）

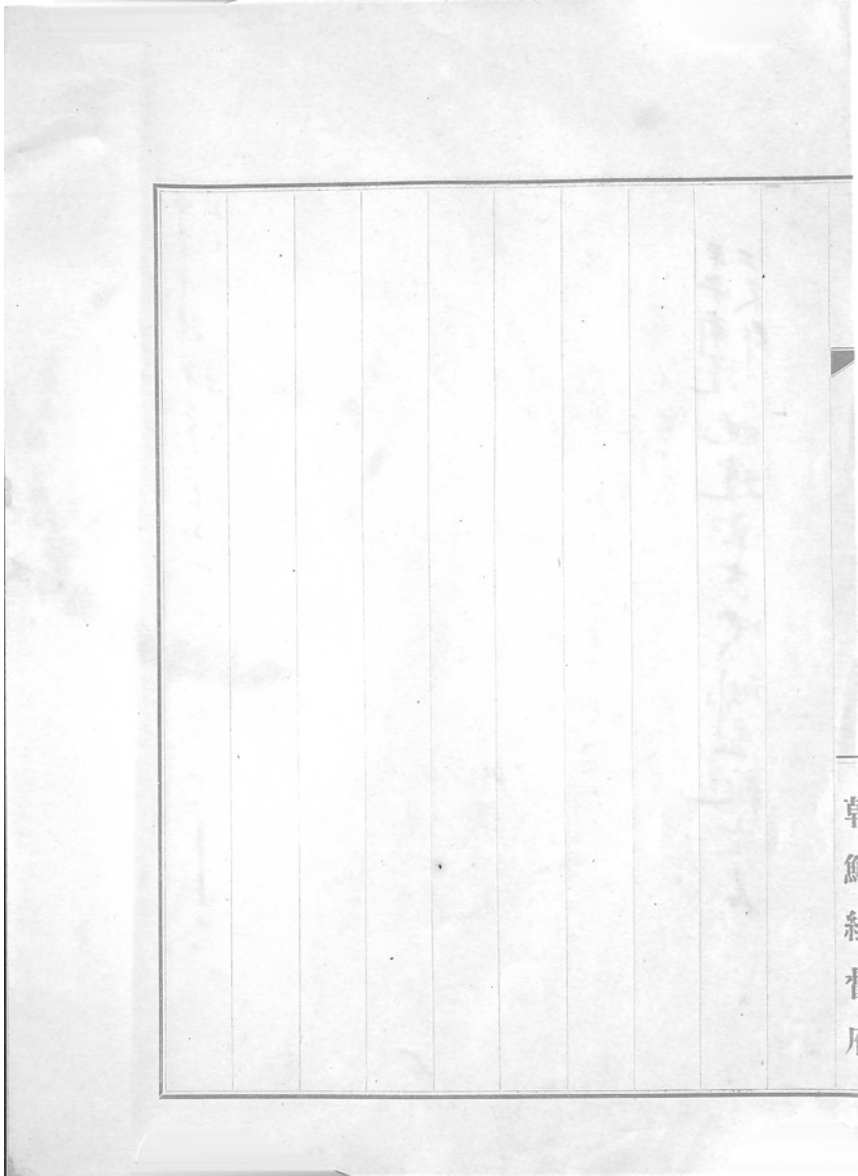


『大正五年度古蹟調査報告』に関するもの（草稿他）
版二二三（一枚目・表）

平安南道
江東郡
晚達
面古墳
調査
報告書

月
羊
總
書
子

仮二丁四（二枚目・裏）



平安南道 晚達面古墳調査報告書
牛東郡

目次

本文

一、緒言

二、晚達面第一號墳

（石塚）
（昭和十一年）

三、晚達面第二號墳

（土塚）

四、晚達面第三號墳

（石塚）

五、結語

写真印画

月 羊 記 事

一、勝洲旧古墳群全第(南方可望也)〔大正三十九前撮影〕

二、同 古墳群全第(山地向伏瞰也)〔同〕

三、晚達面第一號墳(勝洲洞山)〔林以石塚〕前面〔大正三十七後撮影〕

四、同 墳前面左部 〔同〕

五、晚達面第二號墳(勝洲洞山)〔林以土墳〕前面〔大正三十七前撮影〕

六、同 墳羨道 〔大正三十八後撮影〕

七、同 墳玄室天井 〔同〕

八、同 墳玄室天井 〔同〕

九、同 晚達面第三號墳(勝洲洞山)〔地以石塚〕前面〔大正三十七後撮影〕

一〇、同 勝洲洞山林以露出石槨前面〔大正三十七前撮影〕

三 勝湖洞畑地収露出石椁後面(卷三十七後摺影)

三 勝湖洞畑地収古墳崩壊状態(卷三十九後摺影)

一四 芳岩洞古墳

白

一五 晚達山(勝湖洞所見) (卷三十九後摺影)

實測図

一 勝湖洞古墳分布図

二 芳岩洞古墳分布図

三 晚達山第一號墳(勝湖洞山) 平面図・前

面図及縦断面図

四 晚達山第二號墳(勝湖洞山) 平面図

經断面圖・橫断面圖・石椁平面圖

石椁經断面圖

五、晚達面第三號墳(勝和洞畑)平面圖

經断面圖

目次終

九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日
墳去室床部	墳玄室天井	墳羨通	勝湖洞山林双土墳前面 <small>其北東部</small>	勝湖洞畑地双石塚前面 <small>其北東部</small>	塚前面左部	勝湖洞山林双石塚前面 <small>其北東部</small>	古墳群全第(山地)伏魔之 <small>其北東部</small>	大正六年 三月朔至 江東郡 晚達面古墳字真目録 <small>(其北東部)</small>
(日)	(日)	(大正三十八後撮影)	(大正三十七前撮影)	(日)	(日)	(大正三十七後撮影)	(日)	(大正三十九前撮影)

一〇、勝湖洞山林内露出石厚前面在江東部 (大森三十七後掘取)

一一、勝湖洞地内露出石厚在江東部 (大森三十七後掘取)

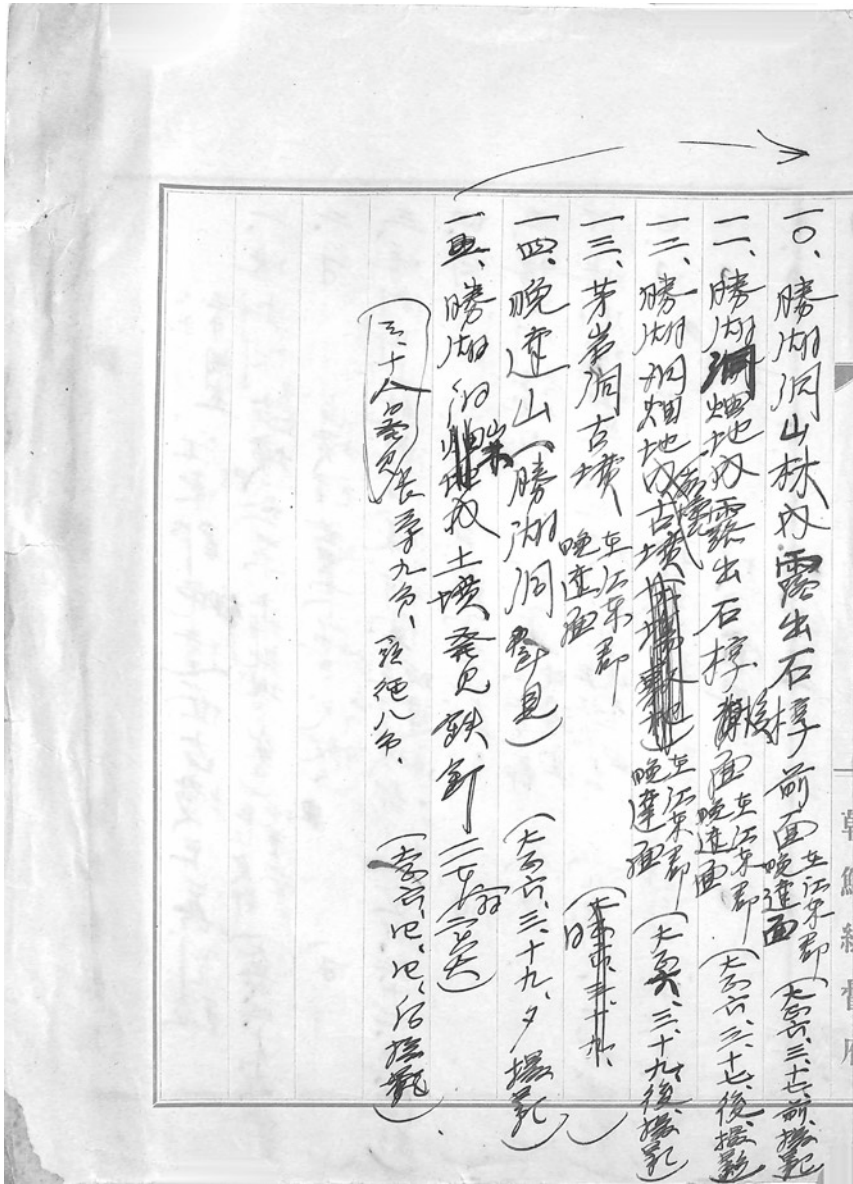
一二、勝湖洞地内古墳在江東部 (大森三十九後掘取)

一三、茅峯洞古墳在江東部 (大森三十九)

一四、晚達山(勝湖洞) (大森三十九)

一五、勝湖洞地内土坑在江東部 (大森三十九)

三十八号墓 大森三十九 大森三十九



復命書

平安南道江東郡晚達面十六小野田せめと

製炭株本會社兼地及此

地力ニ存ス古墳

大正五年三月十五日

十七日ヨリ十九日ニテ

翌光日ヨリ

平安南道江東郡晚達面古墳調査報告書

之ヲ提出ス

大正五年四月十日

植田・鈴木

同

朝鮮總督府囑託

少場恒吉
筆舟

朝鮮總督府囑託
長谷川好義
敬

草魚糸重月

2.

東に於ける墓の土塔 (土塔) 伊れも右様の一帯を露出せり。

晩年、酒勝、柳河の古墳群を西に距る可
の半尾、日面、茅岩、河川、河 七十墓の古墳
散在せり。

以上述べし勝河河、巴陵河、山形、茅岩、河川、
れる約三西墓の古墳は其外形及び石槨の構
造より觀察して、何れも古墳時代のも
たる可、疑の餘地甚く、蓋、長身玉の平懐帯
却後、然地、地 居りし有力者の墓と推測

明洋恩啓

の代表的なものと見做す。比較的完存するもの
 一、墓の土墳とを調査せり。左に項を分つて其
 概要を述べおし。

二、晩造面一號墳

~~（詳述）~~
 (静岡の山
 林内石塚)

平安京道江平郡 晩造面、晩造山の西

麓、静岡川の山林中 ~~（詳述）~~ 緩傾斜の地

造られた石塚あり。今崩壊して、然るに墳の

中心位置は南初の形跡を知る能はずり、

~~（詳述）~~

高句麗國の城より遺墟たる、~~（詳述）~~ 孫氏の古葬

明洋恩啓

俺は少林に一面耕畑に
て存す。子何の如
男中九歳同歳中終

香林寺に在りて
香林寺に在りて
香林寺に在りて

林

高句麗が平壤を
部以をん於ては盛
人の覚意せしるるを
中環を以て遺蹟の形

環

中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形

中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形

中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形

中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形
中環を以て遺蹟の形

香林寺に在りて
香林寺に在りて
香林寺に在りて

仮一一〇（五枚目・裏）

草魚精査序

古蹟調査特別報告に就いて

古蹟調査中、古蹟の發掘調査の如きは、或意
味に於ては、古蹟の一帯の破壊あり。故に、其破
壊せらるゝる部分（例へば副葬品、配器の状
態等）に對しては、正確な記録を要す。且、
周等を作製せざるべからず。是れ、古蹟調査即
破壊の責任者の第一なる義務なり。又、
古蹟調査に際しては、代者に對して、禮あり。
故に、或代に於ける種類を異にする。代裏的
な調査に對しては、正確な報告を作り置さ
るべし。

古蹟調査は、耳よりにも月に所ある宮地を調査し、
古蹟調査の調査とす。その中の、その調査を以て、其報告は、聽

覚に訴ふる千言萬語の記載あり、視覚に感ずる一枚の白紙有り。字々一葉の誤謬せき、玄測圖を重しとす。場合多し。蒙んずる玄測圖の調査研宄の報告には、早矣。玄測圖の複製には、最善きを案す。白紙有り。玄測圖の複製には、假すに十分の辨目を以てすを要す。

各時代の墳墓の代表的のものに就いては、白紙の複製調査を決定したる特別報告を複製したく、其次の調査の分一系に據るは、便宜を分合して、略年代を以て左の十部としたし。

一、奈良時代の墳墓（三冊）一冊は副葬品

あり、就中、第百の漆器の如きは、其採拾

2.

の容易なりき。かたに今日に於ては、洋の
 東西を通じて、猶、我邦に在る遺物致に
 收束せらるるものありのみ、實に、吾邦の
 此貴重なる遺物ナルハ能ク少クシ
 く其に紹介するの要ありん。

- 二、帶方時代の墳墓 (一冊)
- 三、倭時代の墳墓 (一冊)
- 四、高句麗時代の墳墓 (一冊)
- 五、馬韓・西伯・耽羅時代の墳墓 (一冊)
- 六、任那時代の墳墓 (一冊)
- 七、新羅時代の墳墓 (一冊)
- 八、次旦・濊・貊時代の墳墓 (一冊)
- 九、高麗・百濟時代の墳墓 (一冊)

明洋書目録

十、朝鮮時代の墳墓 (冊)

(以上十部十一冊)

諸書は、大正九年慶に完了すべし、特別報
告提出は、大正十一年迄に亘り見込。

大正八年三月十八日 記

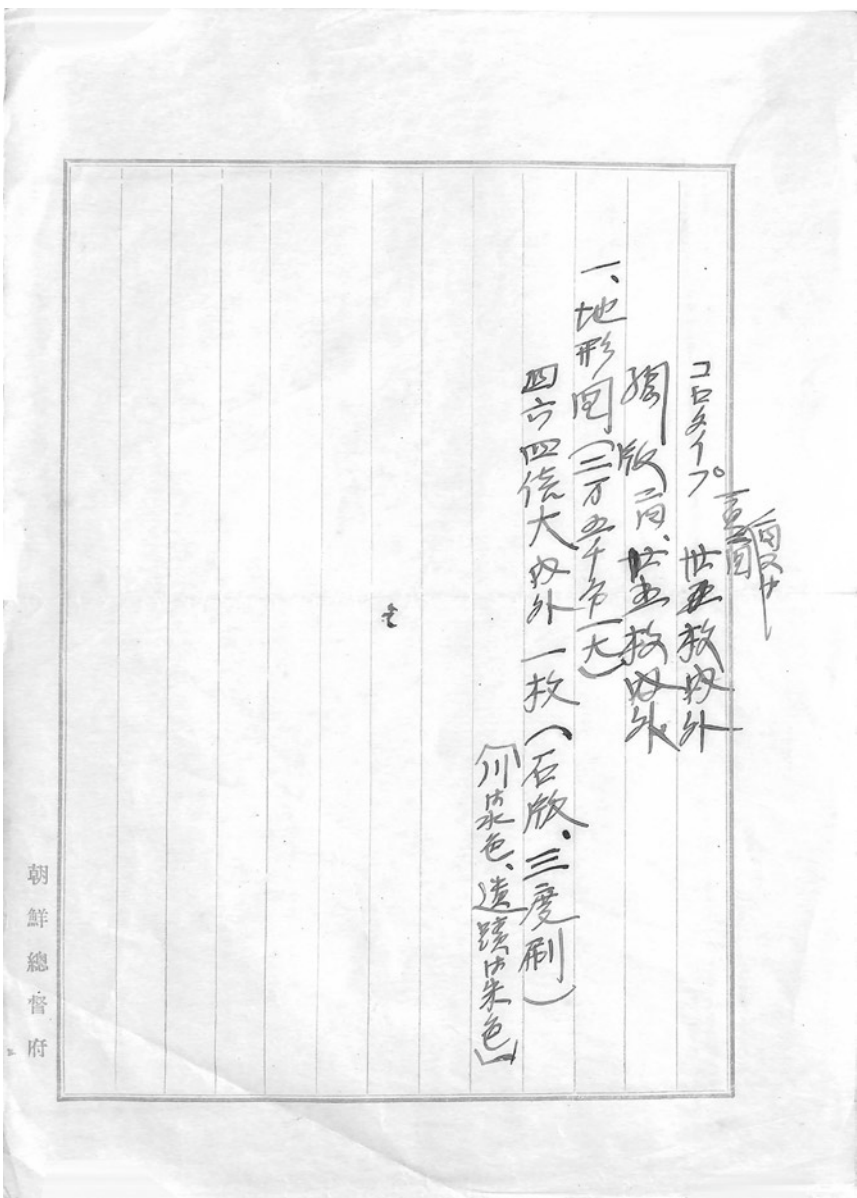
大正八、三、四、

喜 齋 翁 查 片



朝鮮古蹟調査特別報告第一冊
 平壤附近に於ける樂浪時代の墳墓
 一、四六二倍判、假綴、表紙厚紙
 一、本文四號活字（引用文三號）一頁十五行（此一字造
 此五頁内外）
 一、箋別同（一頁監字三分内外横四十分内外）
 一、一頁一回 約廿四枚
 一、一頁一回 約二枚（コロタイプ）
 監約二尺幅約一尺四寸（折込）養色石版一枚
 一、遺物精細同
 一、コロタイプ一頁一圖 約十枚
 一、養色石版一頁一回 約四枚
 一、字と英（約百圖）

朝鮮總督府



目次

一 緒言

二 木樺を存す墳墓

三 龍岡郡海雲而葛城皇河墳

三 大同郡大同北の方墳

三 木樺を存す中河岡皇河を詔す墳墓

三 大同北の方墳

四 木樺を存す外部を墳に包す墳墓

四 大同北の方墳

五 大同郡大同北の方墳

二
一
一
一
一
一
一
一

二
七
七
八

九九

古蹟調査特別報告第一冊正器

正器

頁	目次
1	序
2	第一章 緒言
3	第二章 調査の経緯
4	第三章 調査の概況
5	第四章 調査の成果
6	第五章 調査の結論
7	第六章 附記
8	第七章 参考文献
9	第八章 索引
10	第九章 附録
11	第十章 終語
12	第十一章 附録
13	第十二章 終語
14	第十三章 附録
15	第十四章 終語
16	第十五章 附録
17	第十六章 終語
18	第十七章 附録
19	第十八章 終語
20	第十九章 附録
21	第二十章 終語
22	第二十一章 附録
23	第二十二章 終語
24	第二十三章 附録
25	第二十四章 終語
26	第二十五章 附録
27	第二十六章 終語
28	第二十七章 附録
29	第二十八章 終語
30	第二十九章 附録
31	第三十章 終語
32	第三十一章 附録
33	第三十二章 終語
34	第三十三章 附録
35	第三十四章 終語
36	第三十五章 附録
37	第三十六章 終語
38	第三十七章 附録
39	第三十八章 終語
40	第三十九章 附録
41	第四十章 終語
42	第四十一章 附録
43	第四十二章 終語
44	第四十三章 附録
45	第四十四章 終語
46	第四十五章 附録
47	第四十六章 終語
48	第四十七章 附録
49	第四十八章 終語
50	第四十九章 附録
51	第五十章 終語
52	第五十一章 附録
53	第五十二章 終語
54	第五十三章 附録
55	第五十四章 終語
56	第五十五章 附録
57	第五十六章 終語
58	第五十七章 附録
59	第五十八章 終語
60	第五十九章 附録
61	第六十章 終語
62	第六十一章 附録
63	第六十二章 終語
64	第六十三章 附録
65	第六十四章 終語
66	第六十五章 附録
67	第六十六章 終語
68	第六十七章 附録
69	第六十八章 終語
70	第六十九章 附録
71	第七十章 終語
72	第七十一章 附録
73	第七十二章 終語
74	第七十三章 附録
75	第七十四章 終語
76	第七十五章 附録
77	第七十六章 終語
78	第七十七章 附録
79	第七十八章 終語
80	第七十九章 附録
81	第八十章 終語
82	第八十一章 附録
83	第八十二章 終語
84	第八十三章 附録
85	第八十四章 終語
86	第八十五章 附録
87	第八十六章 終語
88	第八十七章 附録
89	第八十八章 終語
90	第八十九章 附録
91	第九十章 終語
92	第九十一章 附録
93	第九十二章 終語
94	第九十三章 附録
95	第九十四章 終語
96	第九十五章 附録
97	第九十六章 終語
98	第九十七章 附録
99	第九十八章 終語
100	第九十九章 附録
101	第一百章 終語

古蹟詳考特別教養第一冊 正陽

誤

正

十七 泉
三 於乙卯古蹟附近遺蹟同

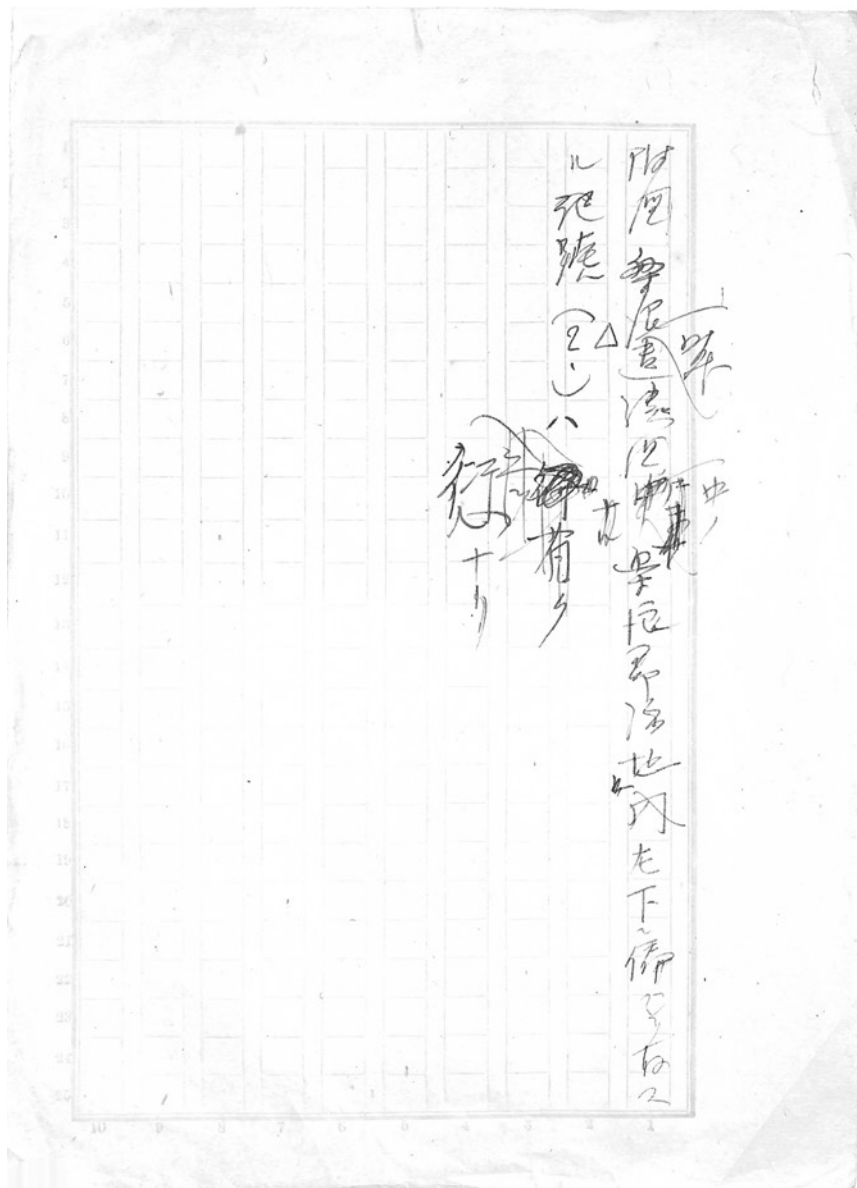
二 平安南道龍岡郡海雲
面。葛城。里。城。地。洞。於乙卯古蹟附近遺蹟同

十七
二 手書遺蹟同郡海雲石葛

三 於乙卯古蹟附近遺蹟同

海河同
城。地。洞。於乙卯古蹟

二 月版ノ下ニ陸軍印所永稱ノ月版ノ左



『朝鮮古蹟圖譜』に関するもの
 仮四―一二（二一枚目・表）

朝鮮古蹟圖譜及解説出版年度割

同張

解説

大正三年度 第一冊、第二冊

大正四年度 第三冊、第四冊

大正五年度 第五冊

大正六年度 第六冊

大正七年度 第七冊

大正八年度 第八冊、第九冊

大正九年度 第十冊、第十一冊、第十二冊

大正十年 第十三冊、第十四冊

第一冊、第二冊

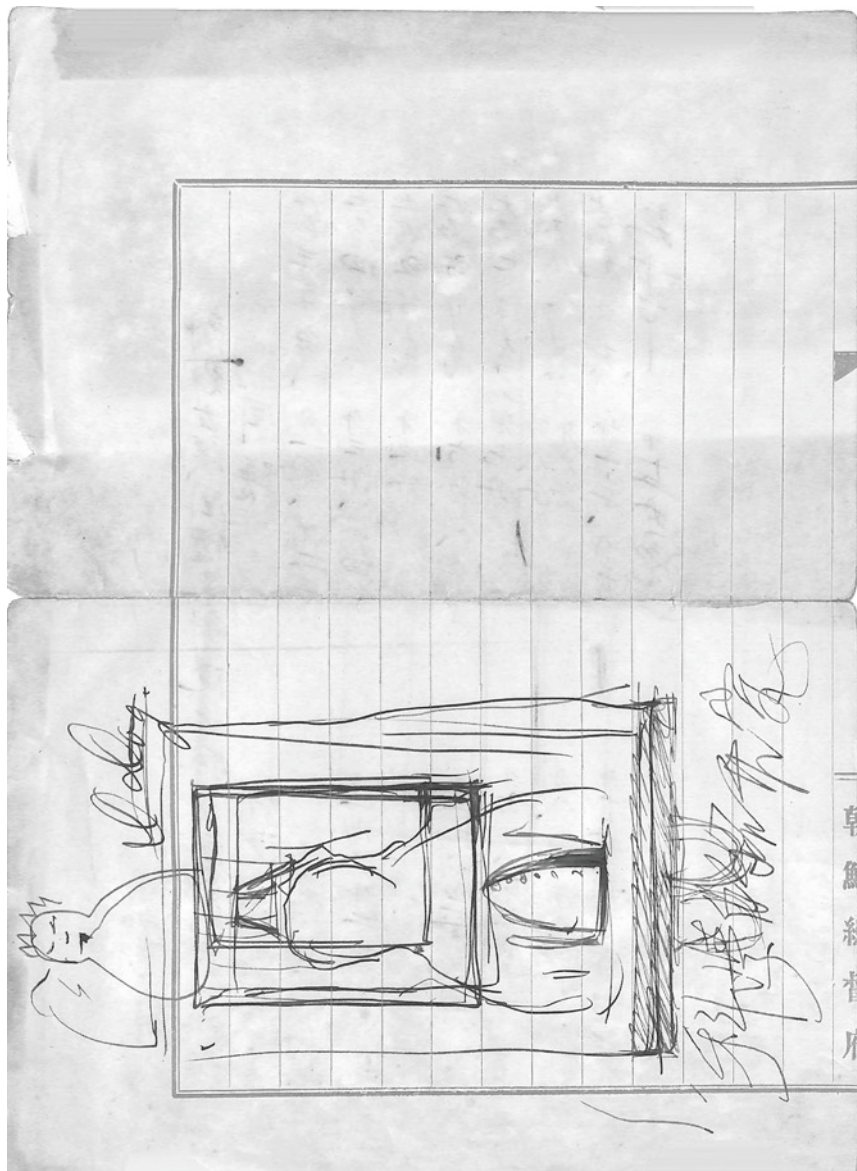
第三冊、第四冊、第五冊

第六冊、第七冊

第八冊、第九冊

第十冊、第十一冊、第十二冊

月 洋 書 局



草 齋 繪 卷 序

年度	図彙	解説
大正三年度	才一冊 才三冊 (右千部)	才一冊 才三冊
大正四年度	才三冊 才四冊 (右千部)	才一冊 才三冊
大正五年度	才五冊 (一千部)	
大正六年度	才六冊 (三西千部)	才三冊 才四冊
大正七年度	才七冊 (七西千部)	才五冊 才七冊
大正八年度	才八冊 才九冊 (右七西千部)	才七冊 才九冊
大正九年度	才十冊 才十一冊 (右七西千部)	才十冊 才十一冊
大正十年度	才十二冊 (右七西千部)	才十二冊

朝鮮古蹟圖彙及解説出版年表

月 洋 恩 督 寺

一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...
三十一	...
三十二	...
三十三	...
三十四	...
三十五	...
三十六	...
三十七	...
三十八	...
三十九	...
四十	...
四十一	...
四十二	...

朝鮮古蹟 國語出版事務

漢語算

七卷算系
才三冊、才四冊、才五冊、略解説起草

華野算

才一冊、才二冊、英文略解説訂正

華野算

才六冊、歸還系

算

才三冊、才四冊、才五冊、略解説印刷校訂

算

才六冊、印刷校訂

算

才六冊、略解説起草

算

才六冊、略解説印刷校訂

算

才三冊、才四冊、英文略解説印刷校訂

算

才三冊、才四冊、第五冊、英文略解説起草

算

才三冊、才四冊、第五冊、英文略解説起草

明洋恩習守

英辞、算

頭本

頭本

英辞、算

頭本

中三冊、中四冊、中五冊、英文略解説、換圖

同

中六冊、英文略解説、起草

同

同

換圖

印刷、柱、弓

皇 德 宗 天 曆 月

何らかの出版物に関わるもの
 仮四一五三（二七枚目・表）

茶鉢

洞版

~~一枚~~一枚

（十、五、七、角）

九枚（十、五、七、角）

磁版 一頁大、片、五枚

地用 一枚

三升

陶の廿枚（十、五、七、角）

七枚（十、五、七、角）

石版 十枚

九枚

新紙

一枚（一枚、二、五、大）
 一枚
 二枚

明洋恩督寺

仮四十五四 (二七枚目・裏)

朝
魚
紙
書
序

仮六十二（二枚目・裏）

草魚糸書片

仮六十四（二枚目・裏）

草
魚
糸
香
月

仮六―六（三枚目・裏）

享
魚
糸
香
所

仮六十八(四枚目・裏)

享
徳
緒
書
月

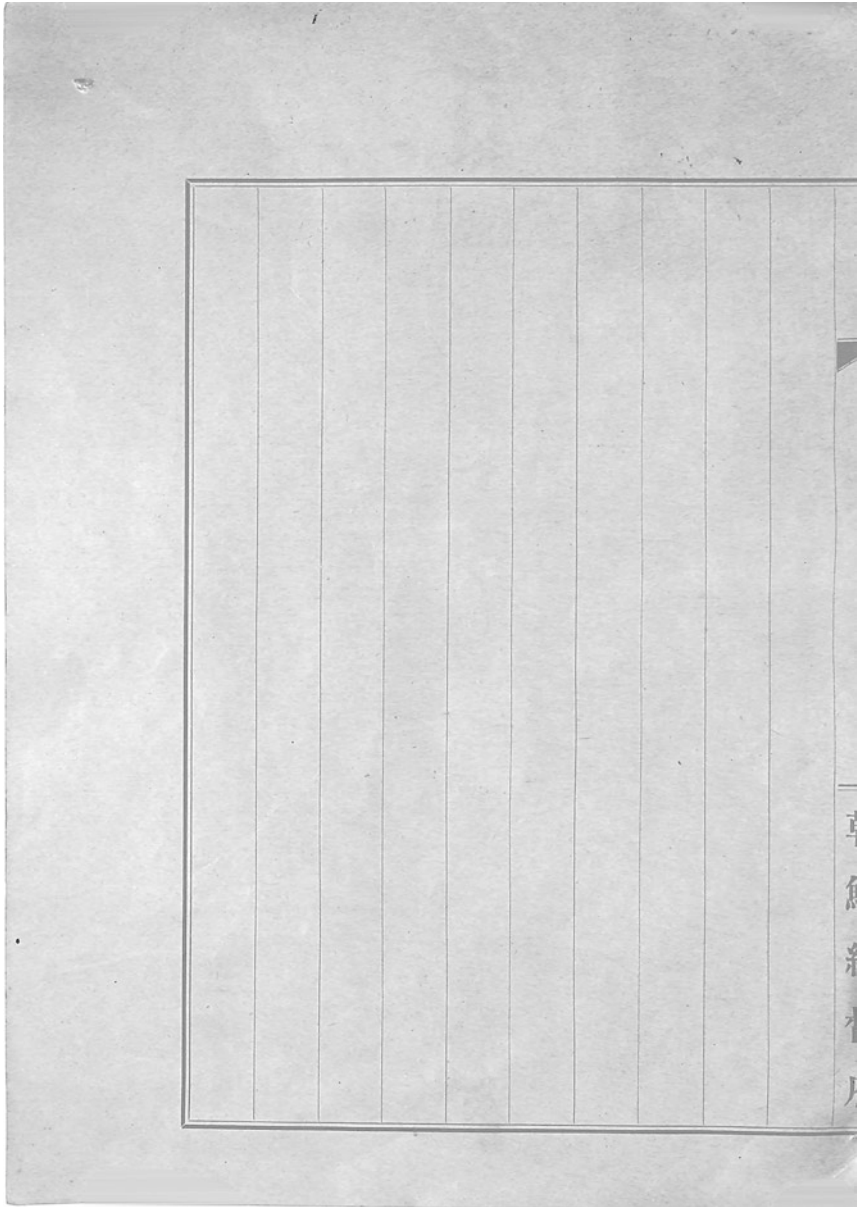
36
上下
五枚目

40 39 38 37 35 34 33 32

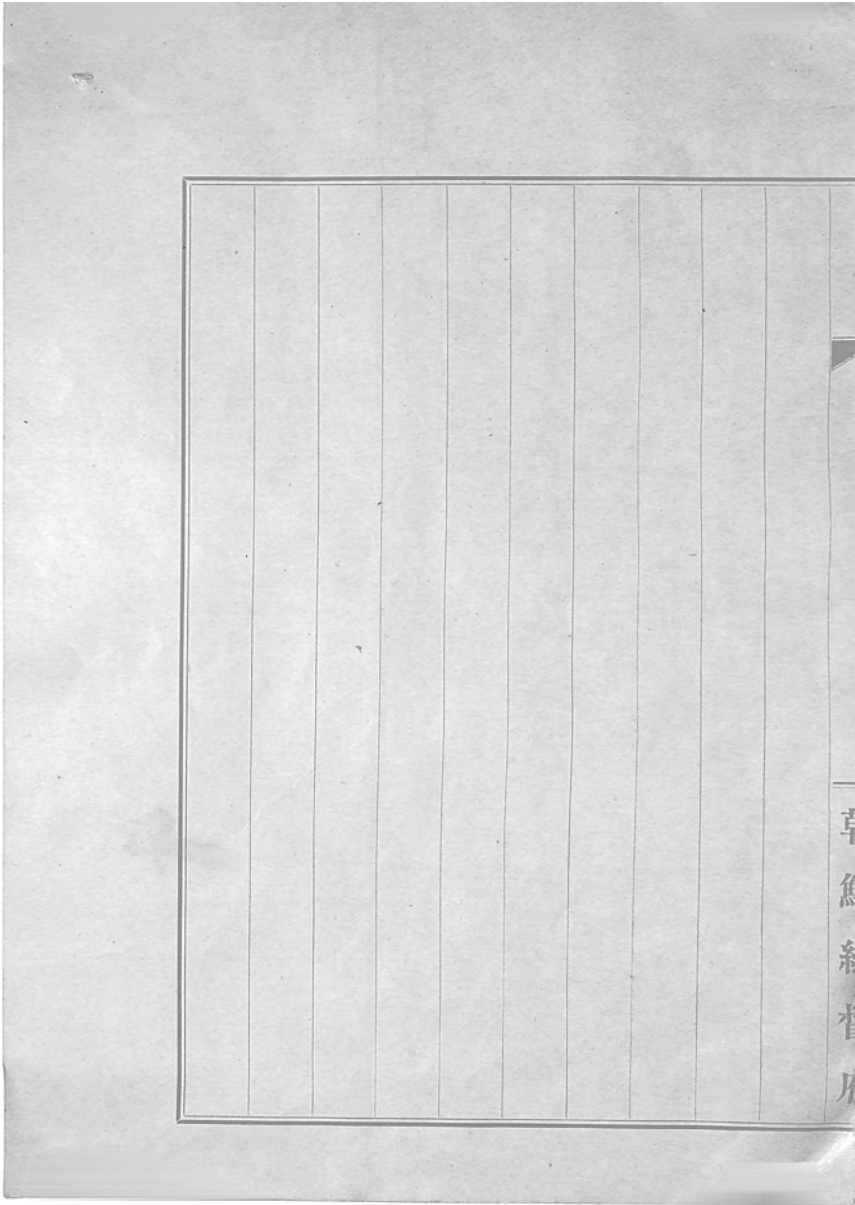
(33) 上	(32)	(31) 上	(40) 上	(37) 上	(38) 上	(37) 上	(35)	(34)
(33) 下		(30) 下		(38) 下	(37) 下			後世白
	三			三			三	三
							三	三
							三	三
							三	三
							三	三
							三	三

月
羊
惣
各
年

仮六一〇（五枚目・裏）



仮六十二(六枚目・裏)



				53	52	51
白	板	板	板	55	54	53
二十	十四	五	後			
			別	7	7	7

月 羊 恩 督 寺

錦
宗

若村五郎

之右衛門 後期

少 土墳

少 可樂地土墳

少 麻呂寺土墳

少 平之川土墳

少 高陽土墳

少 空山土墳

少 扶余

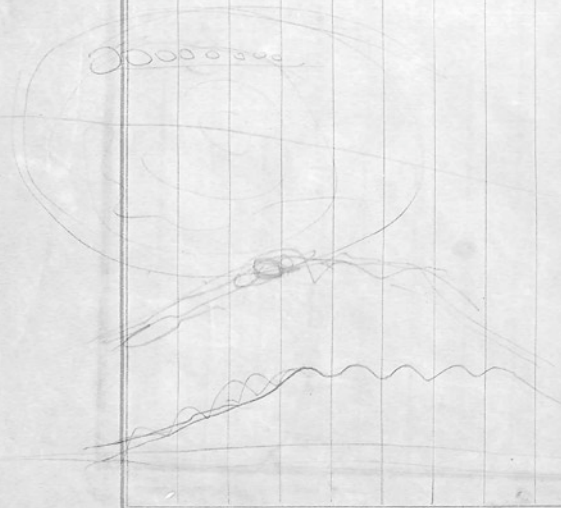
少 土墳

少 土墳

少 土墳

少 土墳

麻呂寺 配電局



一 草 集 一 卷 一 冊

九月十日

大正六年度後期古蹟調査豫定日程
赤城 松坡着

松坡 滞在

十日 赤城 着

三日 赤城 滞在

四日 赤城 稷山 着

五日 稷山 滞在

七日 赤城 公州 着

大正六年

五八	五七	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九
尾州滞在		尾州滞在		尾州滞在		尾州滞在	井邑滞在	井邑滞在	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着	尾井邑着

十月廿一日
十月廿一日

五九	麗州	發木浦	荒
方〇	木浦	帶在	
方一	日	發靈叢	荒
方二			
方三			
方四			
方五			
方六			
方七			
方八			
方九	同		
七〇		發長興	荒
七一			
七二			
七三			
七四	日	發康津	荒
七五			
七六			
七七			
七八	日	發木浦	荒

麗州發木浦荒
木浦帶在
日發靈叢荒

靈叢帶在

同
發長興荒

長興帶在

日
發康津荒

康津帶在

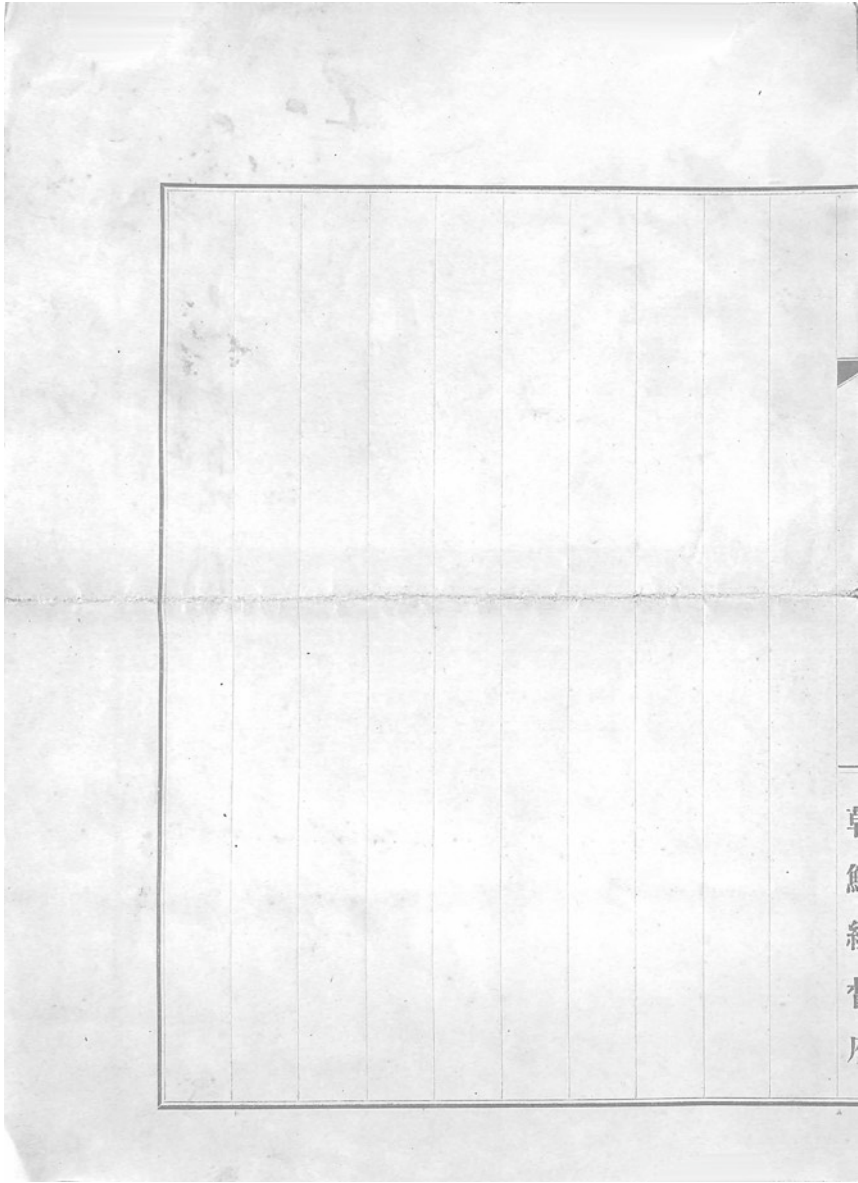
日
發木浦荒

土丹壱

七九
八〇
日 木 浦
愛 滯 在
島 端
夏

月 羊 惣 寄 寺

飯五十六(三枚目・裏)



享
魚
糸
有
片

喜島

○ 小坊

播磨屋 二墓

小川

外形の墓のまの(浮石)のまの、前方後円のもの

少子

松尾寺配堂内、仙岩寺配堂内

少子

無水長塚

少子

船中 船倉

少子

民堂 寺内 地蔵 行

少子

巨塚 山塚

少子

備中

少子

御 塚

七ヶ 新橋期

二八十三

羽 洋 總 管 寺

○方塔寺

少塔

少

少塔

少塔

○少

威安寺塔

石塔

石塔

石塔

石塔

石塔

才八十一塔

才十三塔

才十一塔

石塔

才九塔



喜 無 精 五 所

氏名	用務	出生時日	帰任時日	地方
谷井所一	高瀬湖	大正七年十月廿九日	大正十年十一月廿九日	全羅南道・慶尚南道
少坂恒孝	〃	大正七年十月廿九日	大正十年二月十日	全羅南道・慶尚南道
少川路吉	〃	大正七年一月十日	大正十年一月十日	全羅南道・慶尚南道
跡美健	〃	大正七年十月廿九日	大正十年一月十日	全羅南道・慶尚南道

小磯子 宇佐江
 出立 南野 地方
 遺蹟 遺物の調査を遂げたるを以て
 遺蹟 遺物の調査を遂げたるを以て

月 羊 惣 考 冊

り。今其概況及復管状也。

第一 窪川郡 (金野半道)

甲一 名 窪川郡 窪川面建門外

抱笠台代 備半
高飛人

甲一 窪川郡 窪川面建門外
高北戸へ元出たなりと云ふ
此の角大面取りの抱ん
之より遠く
窪川郡 窪川面建門外
抱笠台代 備半
高飛人

甲二 大宰府 石立

元西門外に在りしを移建せしもの傍。

丁 二 窪川郡 窪川面建門外

朝野垣期丁

収 四 窪川郡 窪川面建門外

鄭 初 収

窪川郡 窪川面建門外
抱笠台代 備半
高飛人
甲一 窪川郡 窪川面建門外
高北戸へ元出たなりと云ふ
此の角大面取りの抱ん
之より遠く
窪川郡 窪川面建門外
抱笠台代 備半
高飛人
甲二 大宰府 石立
元西門外に在りしを移建せしもの傍。
丁 二 窪川郡 窪川面建門外
朝野垣期丁
収 四 窪川郡 窪川面建門外
鄭 初 収
窪川郡 窪川面建門外
抱笠台代 備半
高飛人
甲一 窪川郡 窪川面建門外
高北戸へ元出たなりと云ふ
此の角大面取りの抱ん
之より遠く
窪川郡 窪川面建門外
抱笠台代 備半
高飛人

任那
新羅
李朝

47
26

42
12.21.

99

大正八年度前期古蹟調査豫想日程
(三井、小坂、中川、野守)

一、高城 瓦器 川原

二、忠州 瓦器 中ノ慶義

三、中ノ慶義 瓦器 高州

四、高州 瓦器

五、瓦器 瓦器 善山

六、瓦器 瓦器 善山

七、瓦器 瓦器 善山

八、瓦器 瓦器 善山

月洋總督府

①

②

①

①

三五 茂城 弄

二六 尾川 弄

二七 三三 弄

二八 大印 弄

二九 大印 弄

三〇 慶州 弄

三一 慶州 弄 (勢野 陵 弄)

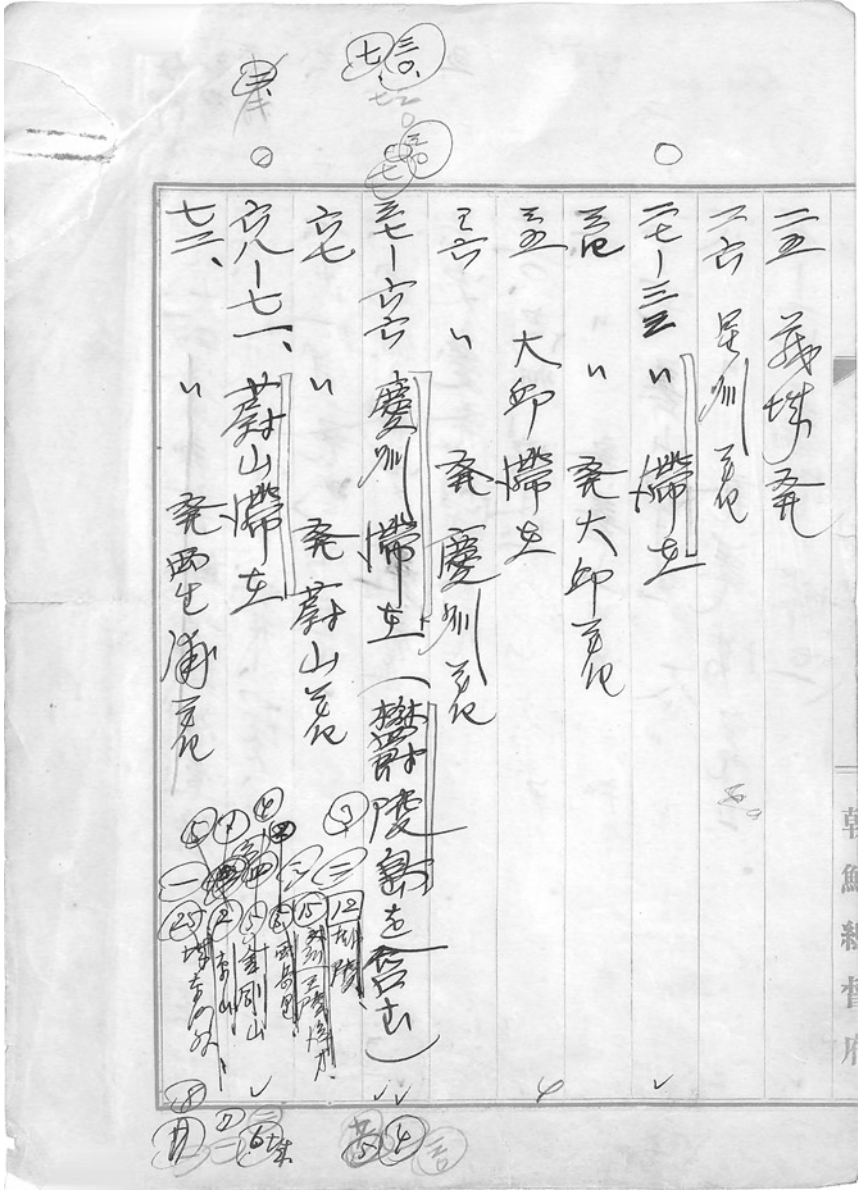
三二 蔚山 弄

三三 蔚山 弄

三四 西生 弄

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



<p>⑤ ⑥ ⑦</p>	<p>⑧ ⑨ ⑩</p>	<p>⑪ ⑫</p>	<p>⑬</p>	<p>○</p>
<p>⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳</p>	<p>⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿</p>	<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿</p>	<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿</p>	<p>① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿</p>

飯五十一〇（五枚目・裏）

草魚科 魚片



伏見、
嵐山、
嵯峨、
共々

大正八年度後期古蹟調査
豫想地等

(谷井、少川、野守)

昭和三十二年 (地方より存下)

咸鏡北道 (富寧郡富安より存下)

咸鏡南道 (北青、咸興、安山等)

江原道 (平康、鉄原、春川、江陵等)

海州
新羅
平海
瑞川
春川
江陵

月洋惣督守



耽羅 高麗 新羅

昭三

大正九年夏、前期古蹟、雅李、豫想地方

(平、少切、少川、輝守)

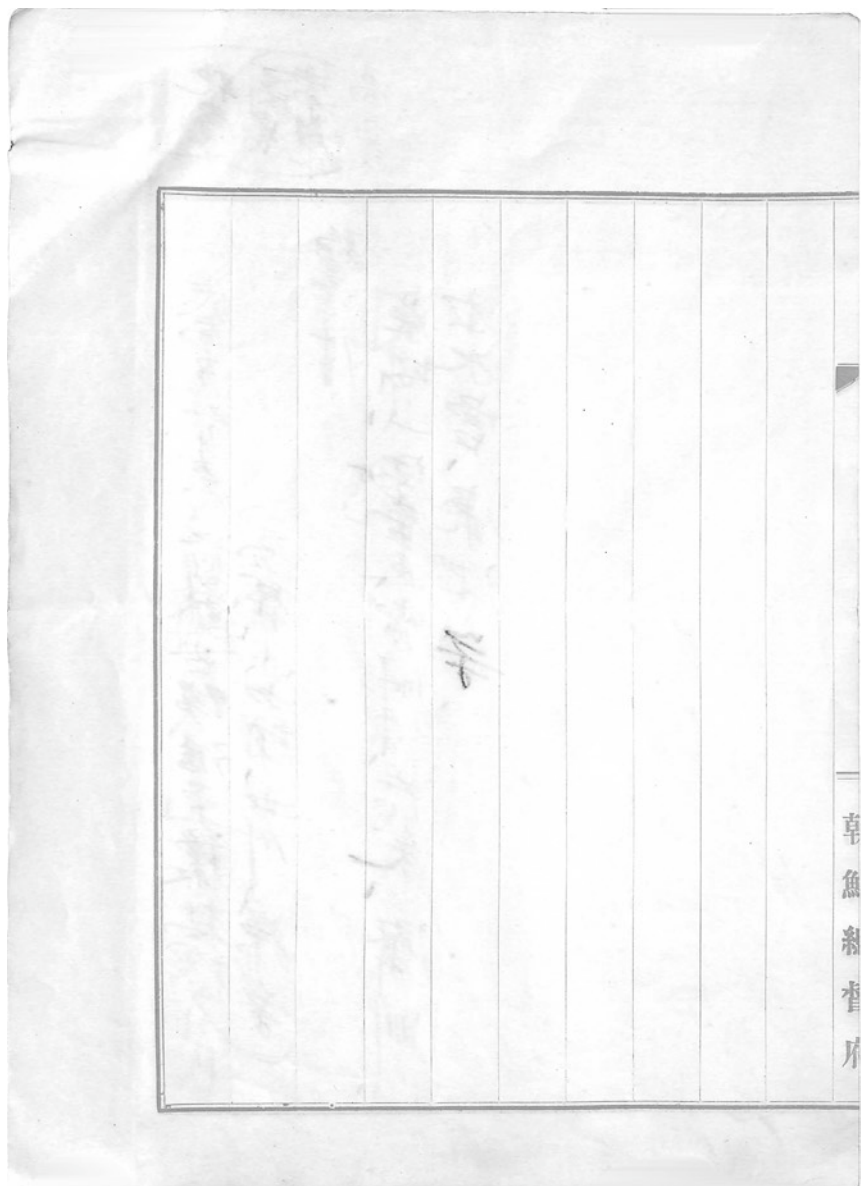
関城、江華、蔚州、茂朱、麟州

本水管、康冲等

月 羊 總 督 寺

飯五十一四（七枚目・裏）

喜魚瀬查所



女英、
李朝朝
高句麗

大正九年慶
治斯古續
張查孫起地方

（希野、谷井、小川、野守）

政三作

長子山麓
及小鴨孫江上游等

仮五十一八（九枚目・裏）



喜
魚
精
査
序

乘浪
高岡親

卯多丹

大正十年一度前
新古蹟池者
特別豫想地方

（窪路、谷井、少坊、少川、野守）

大同郡（大同江面、林原面、大室面）

〔以上各記〕

月羊惣督子



草魚糸巻片

大正九年度前期（おろす月）

江平道東海岸、（まとい）江陵附近―歳及新羅

咸鏡東道（まとい）咸興也存附近―沃沮也存等

咸鏡北道（まとい）会寧・富寧附近―沃沮也存等

大正九年度后期（おろす月）

京畿道（まとい）開城・江華附近―高麗等

全羅東道（まとい）済州・石水堂津附近―耽羅等

高麗等

特別(釋)起

大正十一年夏

平葉系

大同郡

大同公面中葉地等

(林系面・大室面) 三句敷等

(以上片紙)

(特別) 豫想 (約三月)

草紙綴書片

仮四一〇（五枚目・裏）



青
魚
糸
才
月

15
30
25
70
22
48

五月廿廿里改表

七

○月 帶上

○日 帯上

○日 康川表

○日 帶上

○日 帯上

○日 帯上

○日 雲山 帶上

10

—
3

—
4

—
5

77 311 403 416 429

一、李朝初刻製作ノ三尊佛〔李朝坐〕

二、本朝初刻製作ノ道教関係ノ立像〔新羅佛〕

三、〔新羅佛〕

四、火ノ遇ニ顔部ノ瘡ケ有リ新刻立像〔新羅佛〕

五、火ノ遇ニ右ノ面ノ瘡ケ有リ〔新羅佛〕

是ノ像ニシテ

之ノ坐ニ由リ一ニ知リ居座ニ有リ五ノ佛〔坐〕

ノ坐ニ由リ有リ之ノ由リ

ニ由リ有リ之ノ由リ

之ノ由リ有リ之ノ由リ

一ノ坐ニ由リ有リ

29. Small Buddhist bronze figure, gilt.
極小の佛像に己爾の光緒帝、
景范帝、の印を刻す。
Meda. 20.00

30. Bronze Buddhist tripitaka. Taylor. 400.00
李朝の物

31. Bronze figure, Monk, Sung dynasty Chinese.
大脚の僧の像、益州關係の像。
Broken. 400.00

112. Bronze figure, Buddha, Korean Silla period.

乘迦之保尊坐像。右(左)持(持)。

Brooker: 6000

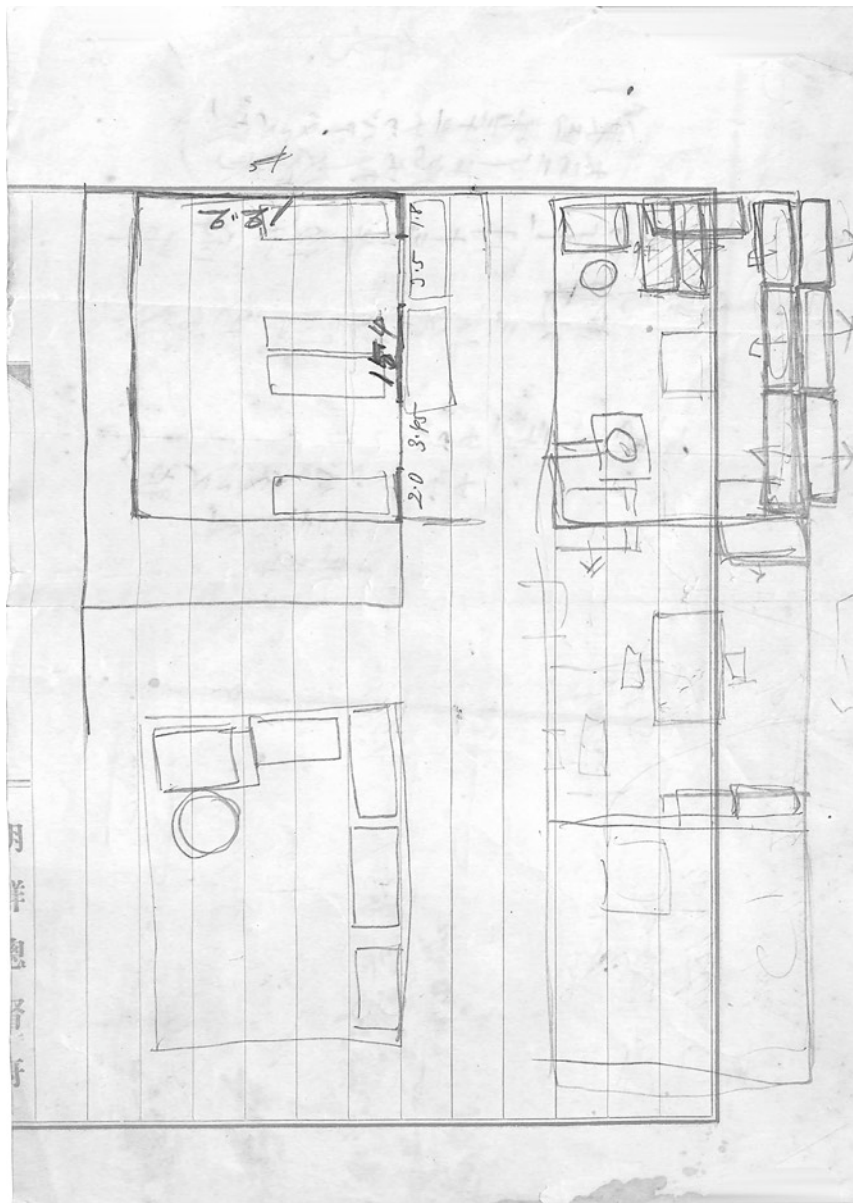
116. Bronze Buddha Statuette. (Silla period.) h=6"

乘迦坐像。左(右)持。中央深金堂(地)。

Shanahi: 3000.

以上五員調査未中銀山地中別物也。

23rd III: 6.



月
羊
息
子
手

至陸奥才三石者、為部、古坂、山崎、今部、孫系、他、

四
至松(酒部)

柳、河、鏡、宇部、三、小、上、坪、

尾、尾、井、

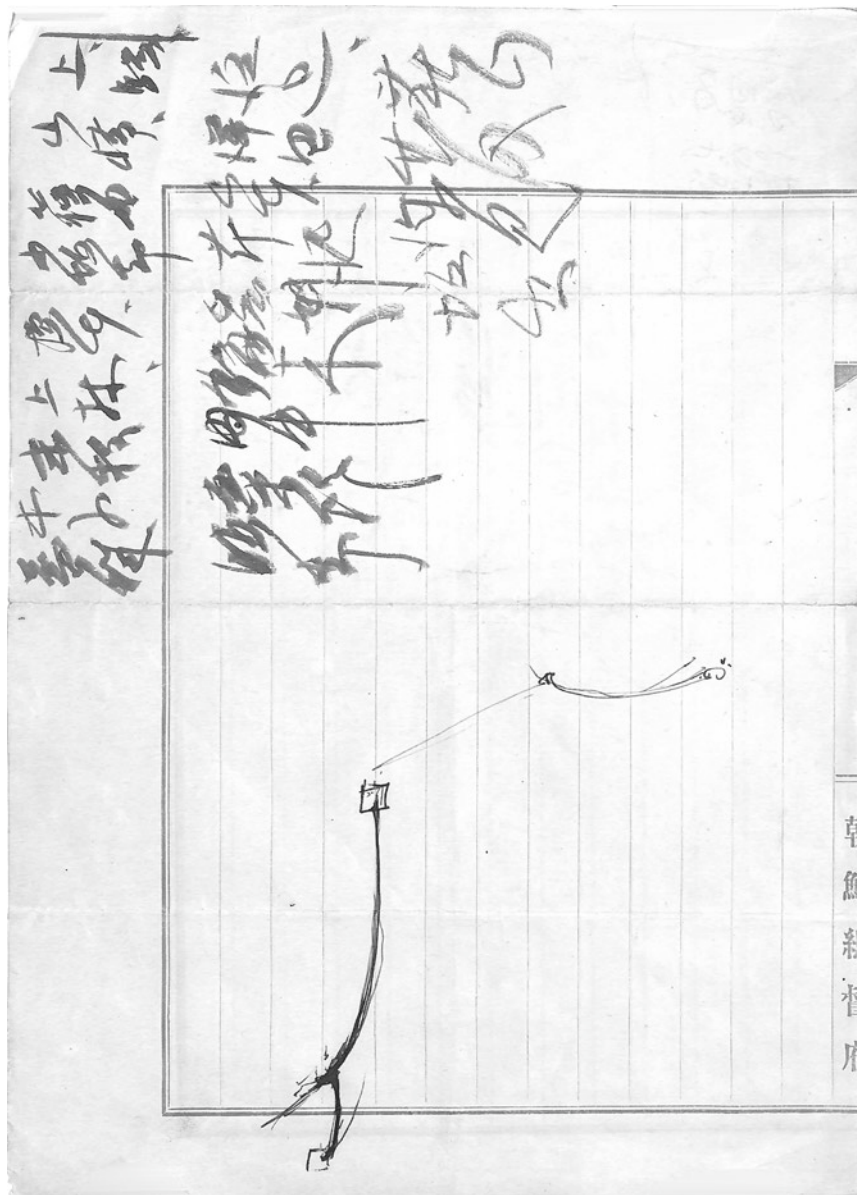
三番

9.1
12
48
15

15.25
14.05

仮四十二四（二枚目・裏）





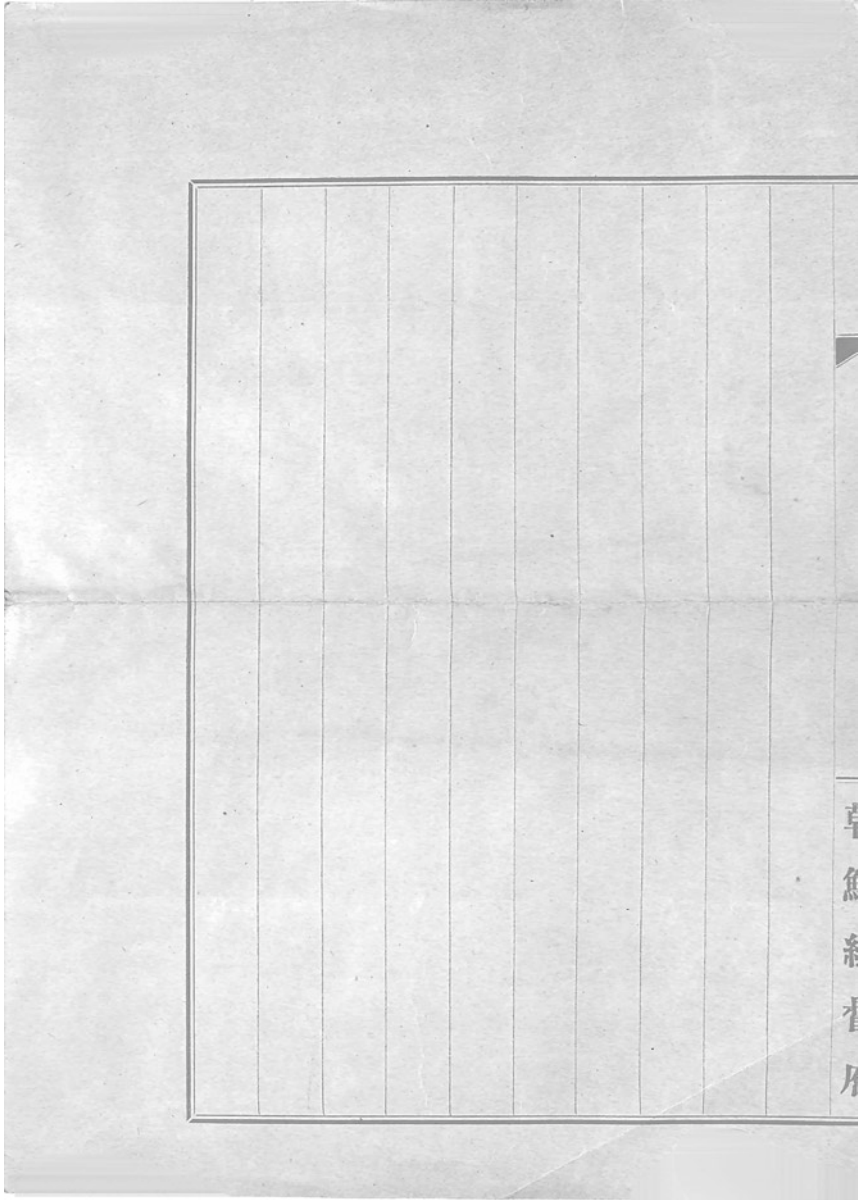
草魚結香片

174. 2) 350
146. 2)

金二十五日	金十五日	金十五日	金二十五日	金二十日	金五日	金十日	金十五日	金二十日	金二十五日	金三十日	金三十五日	金四十日	金四十五日	金五十日	
人受 三言三言人分 (本口迄) 十言三言	木炭 五他組費	土工 五他組費	烟 松料	地籍 口條定料	監督費 (十五言迄) 二人	井 三言九日半二言 (本口迄 文出)	松 一破 三言五人分	栗 洞 口付 十五言人分							

月 洋 惣 督 守

仮六十一六（八枚目・裏）



大正七年系

茶田古墳(三墓)系字

太田福彦

大正七年系

岡地(陽)陵(七墳)係(系字)

太田福彦

扶餘(陵)山(二墳)係(系字)

少塚恒吉

大正九年系

石西(三墓)壁(西)系字(三墓)

太田福系

副幕下子形、状及又様景字

(女)

少村恒吉

大与十中

景字、大空面、様字、

(妻秋)

太田福系

(秋)

少村恒吉

(絶)

四、個人資料

仮四一三五（二三枚目・表）

池田孫家著

日本法剣史 古目解 跋

菊判上装全三冊、即授十卷、

孫家八五余頁、價物書内之紙也

東京、市橋、桶町、

銚子大鑑店 発行

しんじりる古一と装
紙島懐司次

痛字十 糸帯

布装美中五冊、(再版出来)
頁数約十二頁、
空價比内約十卷、
送利約十卷

宝文館 発行

抄書坊堂 著

修養五巻 比古判、
紙帯上装 糸帯、
空價比内約十卷、
送利約十卷、

端八斗、

大鑑屋 発行

信濃中巻 世延針術 正木新
志白子子 文章 五百年紀 発行

明洋書局 發行

草紙類書序

○ 三河新橋大印書
卷之五 入澤 諸
書部 裝全一冊、
送部 十二斗
此部 沈 卷九

○ 七葉 八傑
地方 抄本 著
地方 判 卷中
三三 十一頁
宝徳 一冊七斗
税 八斗
富山 序

○ 吉田 東 傳 卷
御 延 野 史
八 冊
往 川 初 序
天 皇 古 七 〇 頁
税 八 斗 半

○ 萩 路 山 三 著
王 功 後 点 の 唐 史
新 河 卷 各 一 冊
宝 徳 一 冊 半 斗
秋 八 斗
此 部 書 改 入

富山序

著作三八編

世界大辞典

最新大辞典

最新大辞典

最新大辞典

菊池全集

菊池全集

おのゝ壺

仁友社出版部

経典史

西学地理学

南学地理学

西学地理学

菊池全集

仁友社出版部

空想の母

日里 若菜 著

○ 徳米代調書

和紙五任

抄文銀巻行か

○ 北村の考亭書

玉鑑巻中上下二巻
神祇十七五十五

空海三内巻
程の地十卷

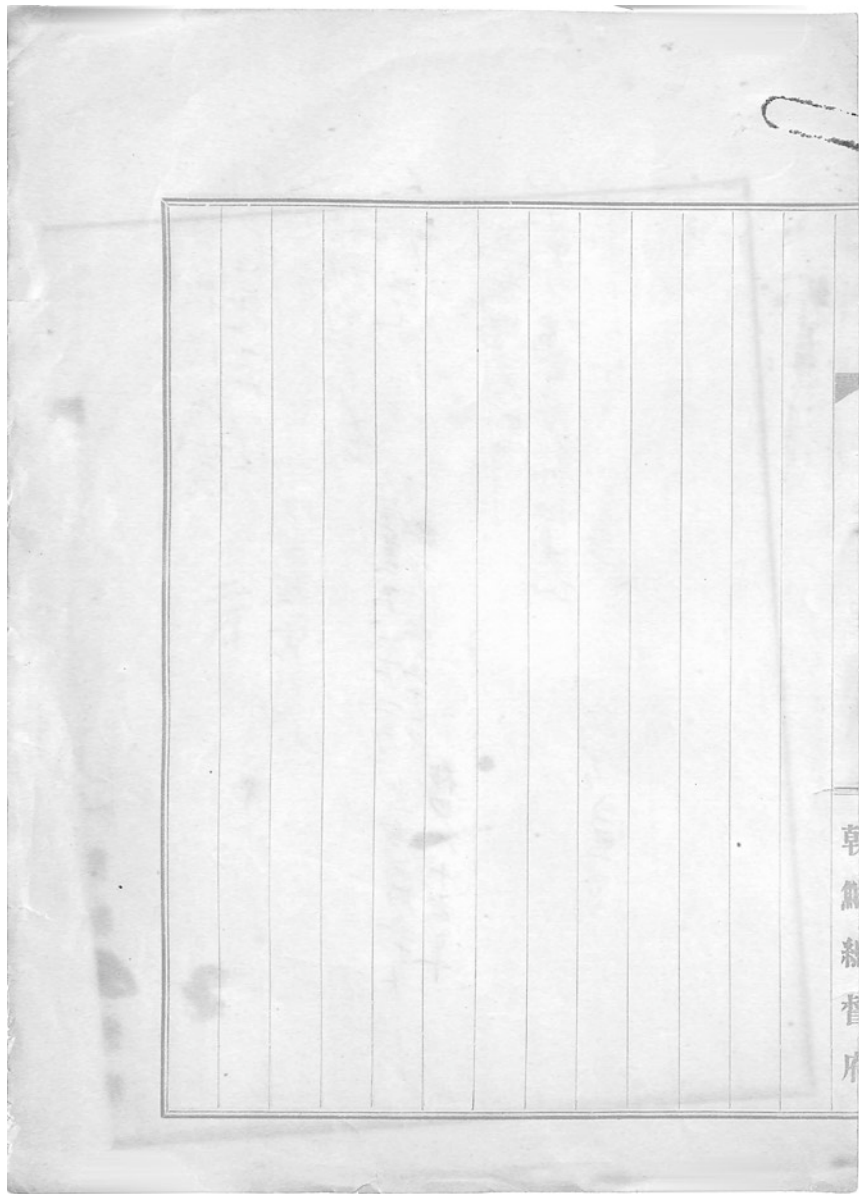
○ 玉振婦美著

○ 史の研究附録年表

文庫の星

月羊總管

仮四十三〇（二五枚目・裏）



草紙類考序

貞吉函(録象水彩) 習字、如乳、

古蹟に採す通報告拔萃

英語学

遺蹟學(英云)

大正七年 文累報告

リ 八年 一 一

ハ 九年 後 一

大正八年 宗吳 整記

ク 七年 一 一

康寧 整記 吳云

習字、如乳、

意書記

一 一 一

中系路記

(後年書) 古更同記

坊川 統載

博抄中

鏡
男矣

割莽男矣

リ
研究

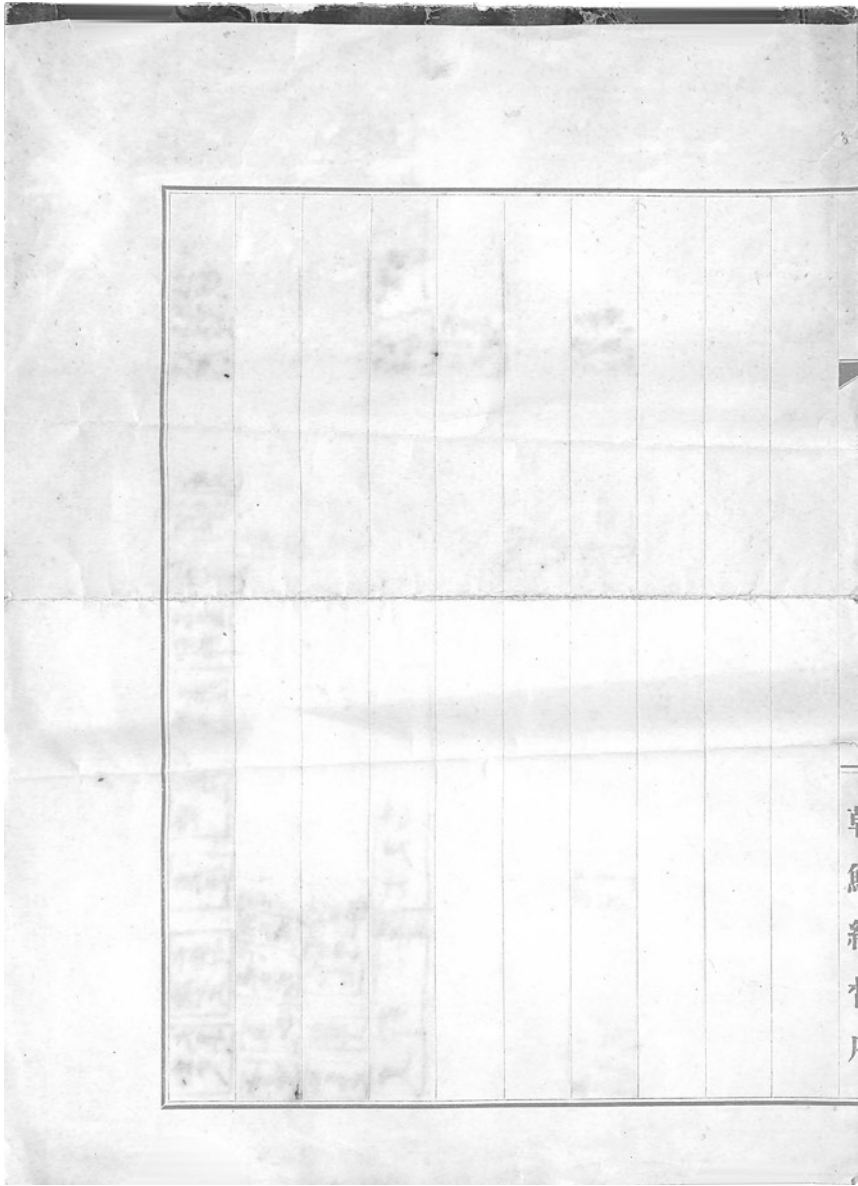
道流菟集

鏡
菟集
の研究

新西菟集

リ
研究

仮四十三四（二七枚目・裏）



草
魚
新
中
月

時	月	火	水	木	金	土	日
95	執筆	朝鮮書畫	執筆	朝鮮書畫	執筆	朝鮮書畫	整理
12	1	1	1	1	1	1	(自由行動)
4	4	4	4	4	4	4	通信
5	5	5	5	5	5	5	通信
6	6	6	6	6	6	6	食
7	7	7	7	7	7	7	英語
8	8	8	8	8	8	8	自由行動
9	9	9	9	9	9	9	朝鮮語
25	25	25	25	25	25	25	茶
95	95	95	95	95	95	95	歌學
11	11	11	11	11	11	11	(通信)
12	12	12	12	12	12	12	手紙

時間割

自大正元年一月廿九日

手紙	楷書	印在画	水彩画	歌学	雑学	英吉利語	朝鮮語	朝鮮史	遺蹟学	朝鮮古書	執筆
3.	3.	3.	3.	3.	3.	6.	3.	3.	3.	10.5	16.5
										通	新
										倍	字
										斗	雑学
										斗	6.
										古拾八時宛	2.

卓 編 糸 査 月

五、詳細不明

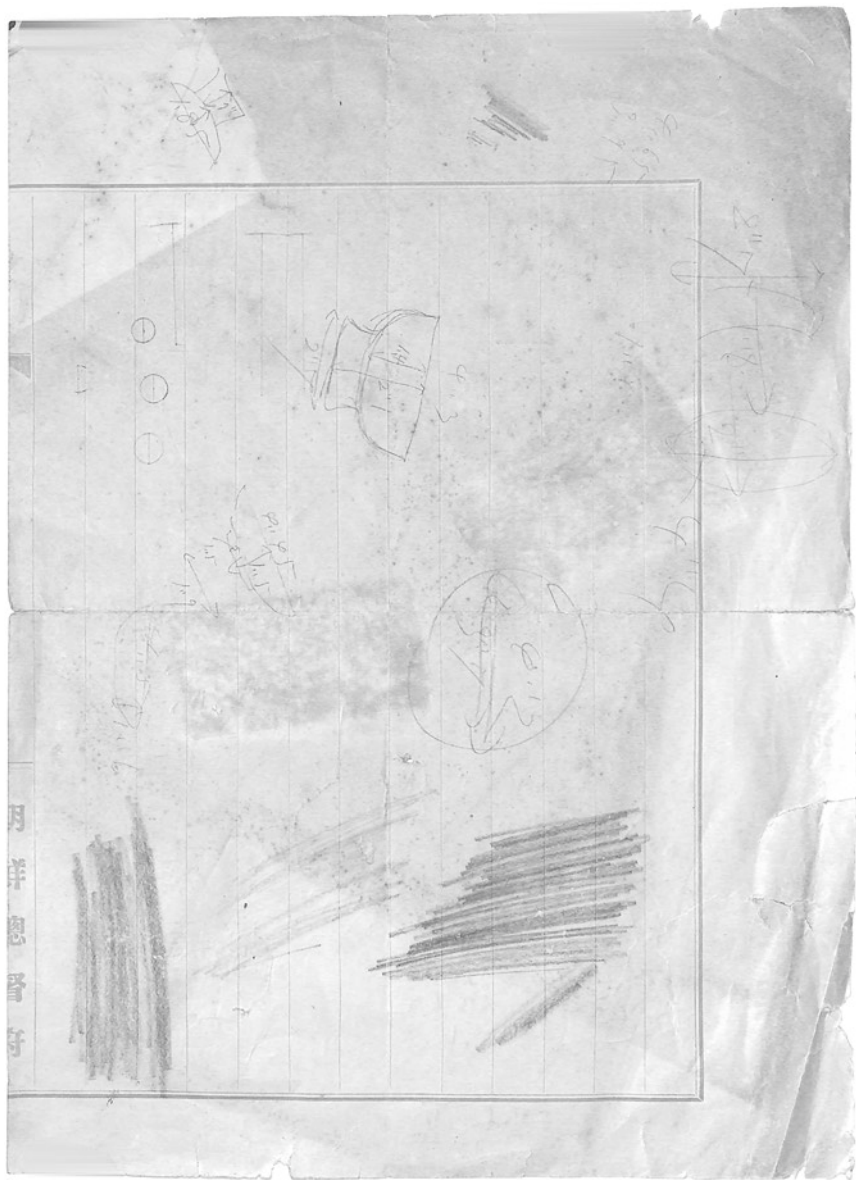
仮一一七（九枚目・表）

The image shows a page from a document, likely a table of contents or index. The page is aged and stained. It features a large rectangular frame with vertical lines, suggesting a table structure. The page is mostly blank, with some faint markings and stains. On the left side, there is a vertical column of text, which appears to be the page number '215' and the page title '新収「谷井濟一関係資料」の概要とその紹介 植田・鈴木'. The text is written in a traditional Japanese style.

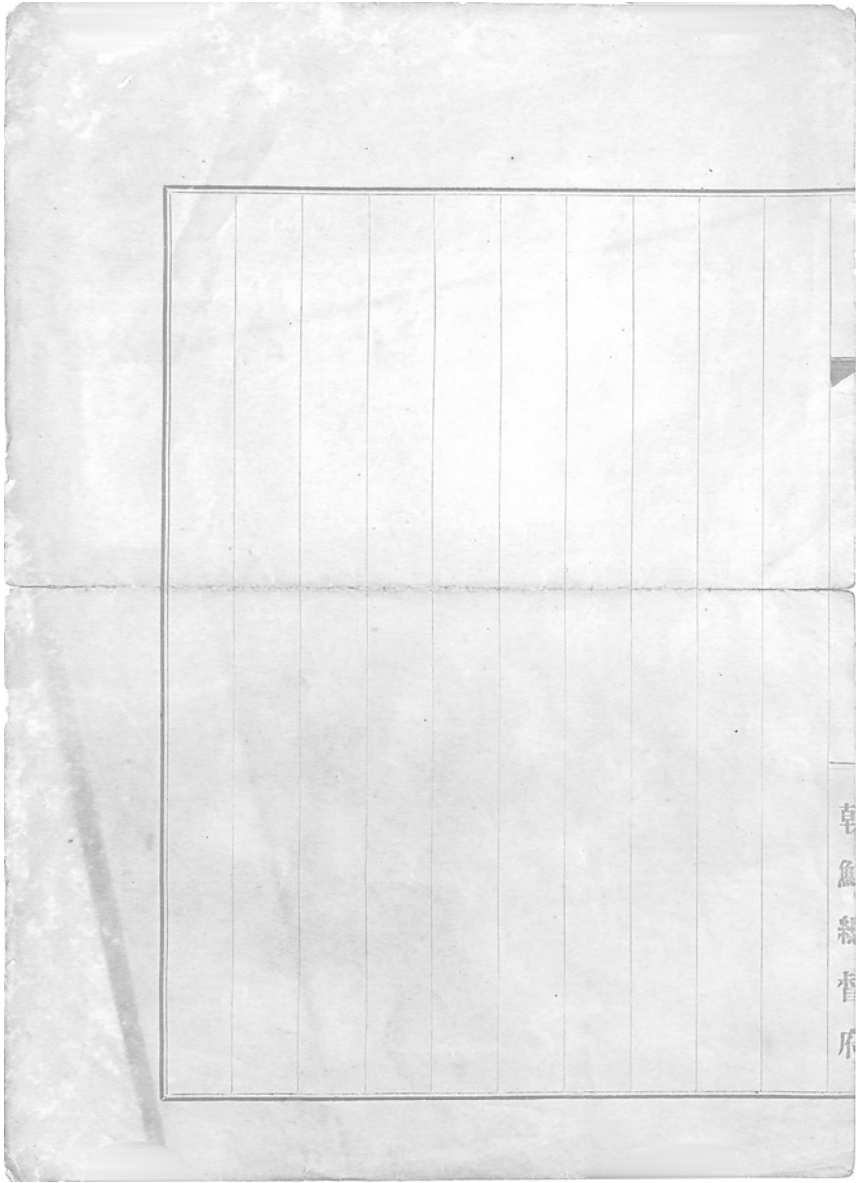
仮二一八(九枚目・裏)



仮四十一（二枚目・表）



仮四十五六（二八枚目・裏）



喜
漁
精
香
原

大理五神像（書誌）

古い海に七回即海安西の浪の山中

仮六一一八（九枚目・裏）

享
魚
鱈
香
席